

北海道ばんえい競走 NO. 3





帯広 8月13日

北見 6月18日

この群衆にこたえよ
ファン

旭川 7月30日

岩見沢 7月2日

会報の発刊に寄せて



北海道市営競馬協議会

会長 五十嵐 広三

昭和四十八年度の会報発刊にあたり、謹んで皆様方のご健勝を心からお慶び申しあげます。本会会報も初刊以来第三号として皆様のお手元にお届けできる運びとなりました。これもひとえに関係各位のご支援の賜ものと深く感謝申しあげます。

さて、昭和四十七年度の市営競馬を顧りみますと市営帯広競馬の五月二十七日を皮切りとし、十一月十三日の市営岩見沢競馬まで開催回数において前年より二回増の延べ十四回八十三日間開催されましたが、その間の勝馬投票券の発売総額五十二億七千三百三十四万八千円、入場人員において二十五万三千人であり伸び率は前年対比それぞれ百三十五、九%、百十一、七%とまさに隆昌の途をたどっているといえましょう。

また、昭和四十七年には岩見沢市、北見市において競馬開催回数各一回ずつの増加がありました。これもばんえい競馬が永年競走の公正確保、諸施設の改善整備等を重点とした諸施策が農林省等各関係機関にご理解をいただいた賜ものと考えます。

近年は公営競馬も関東、関西地域よりも特に東北、北海道、九州の後進地域の伸長がめざましく、これも国民大衆に娯楽の一環として位置づけられ愛好されてきていることを物語っております。それだけに各主催者においては公正確保、施設改善はもちろんのこと実施体制の強化をますます図る必要があるかと存じます。

ばんえい競馬は全国的に類がなく道内四市のみが実施し、平地競馬とは異質の競技内容から独自の研究を重ね修得するものが多く、各主催者においてこれらの努力が今日のばんえい競馬を存続、発展させた成果でございます。また一方、ばんえい競馬の伸長とともに各市においても施設並びに駐車場の狭隘が近年大きな問題として取り上げられ、競馬場建設についても岩見沢市が昭和四十五年に近代的競馬場を建設し、北見市においては用地の取得並びに造成を完了し本年から施設建設に着工本年度中に完成予定と聞き及んでいます。

また旭川市においては、本年用地取得及び造成、スタンドの基礎工事を完了、昭和四十九年秋には施設の完成を予定しています。

更に帯広市においては昭和四十七年度に競馬施設整備基金条例を制定し、新競馬場の建設の備から進め、近年中に近代的競馬場が実現するとのことであります。

市営のばんえい競馬も昭和二十八年施行以来二十一年を迎え人生にたとえるならば成年期に入った感がありますが、しかしこの途はけわしいいばらの途であることもまた現実であります。

これら諸般の問題をふまえ肝に命じ、今後とも公を競馬の推進と大衆の健全娯楽としてより発展させるため一層の努力を傾ける所存でございますので関係機関並びに関係各位の絶大なるご指導をお願い申しあげ会報発刊のご挨拶といたします。

ばんえい競馬の

公正対策について

旭川市地方競馬開催執務委員長

大久保 吉 蔵

競馬執行における我々の責務

岩見沢市畜産課事業係長

中 川 達 雄

ばんえい競馬も月々入場、売上共に記録を更新している現況で考えられることの一つには、作家佐藤愛子氏が先年当市のばんえいを見て書かれた一文のごとくはるか緑林に被われた山々や丘にかこまれた競馬場の澄みきった空のもとで、ス

ケールの大きい入馬一体のスリルと迫力のある素材で爽快なレース展開を楽しめるファン、更には娯楽として麻雀、パチンコ等、大衆娯楽としての小遣銭の範囲内で楽しみながら健全な好奇心を刺激するスポーツとして楽しめるファンの増加に機縁しているものと思う。

近年は公営競技に対するファンの増大とともに競馬事業も急激な伸長をみるに至りましたが主催者はこれら事業を推進するにあたり、ファン大衆の信頼の上に立つて運営されなくてはならないことである。この信頼の基盤となるべく最大の使命は競馬の公正確保であります。

今日の競馬が大衆の健全娯楽として位置づけられ、ますます愛好されてきていますがその反面公営競技に対する世論もいろいろ論議されているところであり主催者は常に公正確保を念頭におき不正の予防、排除に真剣に取りくみ目的達成のため最大の努力を傾注すべきものであると思えます。

市営ばんえい競馬も施行以来二十一年を迎え内容的にも平地競馬と同様漸次充実してきた感がみられこれら公正確保対

策としても逐年改善措置を講じてきたわけでございます。

その内容としては

- 1 VTRの採用
 - 2 ガードマンの導入
 - 3 馬種積載重量物の鉄製及び規格の統一化
 - 4 発馬機（ゲート）の考案採用
 - 5 馬主調教師の名義貸し防止
 - 6 薬物検査の実施
 - 7 きゆう舎管理規則の制定
 - 8 きゆう舎側に対する待遇改善
- など多くの事柄を計画実施してきたわけでありますが今後においても公正確保対策について一層の努力を重ねこれらがばんえい競馬を発展させる最良の要因と考えます。



しかし我々は競馬を愛して来場されるファンの声、競馬関係者の要望などを卒直に受け入れながら、競馬場として満足する環境と公正なレースの実施を行うと共に当市地方財政に寄与する義務と責任を有しております。

競馬開催日になると、朝の執務員会議で今日一日無事故で競技が終るようにと折る気持で出席し、昼食も忘れてレースに注目し、あるいは馬券の売れ方はどうか等気にしながら最終レースが無事終るとほっと一息するときの何んとも言えない満足感には誰にも理解はしてもらえないのではないでしようか。

こういう日課が我々に課せられた責務であると思う。

〔本会創立5周年記念〕

「ばんえい競走草創のころを語る」



座談会

(その1)

出席者

(敬称略)

佐伯 才一 道初代競馬課長

進藤 久憲 道初代総務係長

安達 利夫 道初代企画係長

高瀬 精一 道初代投票係長

瀬下 信三 道初代ばんえい競走主任

竹森 興作 旭川競馬協力会副会長

大原 喬平 帯広競馬協力会々々長

沢田 行治 北見競馬協力会役員

荒木 政司 岩見沢競馬協力会々々長

主催者側

大久保 吉藏 旭川市審議員

山本 英宣 帯広市主事

坂井 清治 北見市畜産主任技師

小倉 輝行 岩見沢市畜産課長

角田 正義 本会庶務課長

小路口 司 本会業務課長

司会

内田 靖夫 本会事務局長

内田 たいだいまから北海道市営競馬協議

会が五年前、四十三年に発足しまして
ちょうど五周年になりますのでそれを
記念して、その行事としまして「ばん
えい競走を語る」座談会を開催したい
と思います。

それではひとつ、市営競馬協議会の
会長は旭川になっておりますので旭川
の大久保審議員から、ご挨拶をお願い
します。

大久保 会長の代理としてまいっておりますので私の方から御挨拶申し上げます。

今日はほんとうに各先生方には大変
お忙しいなかにかこのように大勢お集
りいただきましてほんとうにありがと
うございます。只今局長からお話がご
ざいましたように、ちょうど四市の協
議会が発足してから五周年になるわけ
でございます。昨年の秋以来、記念事
業といたしまして何をやったら良いか
と云うことで四市の主催者で色々と検
討しておったわけでございますけれど
も、ばんえい競走を語る会というよう
なことでこんどのこの座談会をやるう
じやないかという御意見がございまし
たので、実は本日実施させていただきます
たわけでございます。

ばんえい競走につきましては各先生
方御承知のように昭和二十四年に誕生
いたしました今年がちょうど二十五年
目になるわけでございます。もう青年
期に入ったわけでございます。

誕生しました当時は道営競馬として
発足をいたし、よちよち歩きで色々と
各先生方に御指導なり御苦労をされな
がら幼年期あるいは少年期を越えまし
て、やっと今一人前の青年期に入った
というわけでございます。

しかしながら競馬開催業務というも
のがそれぞれこの大衆ファンにつきま
してもですね。ばんえい競走に對しま
しては、ある程度理解され地についた
わけでございますけれど、やはり平地
競馬のような歴史ある、歴史の長いも
のと違ひましてまだまだこれから多事
多難のものが沢山あるわけございま
す。

特に公正明朗な競馬をやるには、や
はり平地と同様な考え方で執行しよ
うということになりまして、先ず今が
ちょうどその過渡期でございます。

これからがようやく社会に出てそれ
ぞれの行く先といえますか、行く道、
方向を定める時期でなろうかと、考
えるわけでございます。

そんなことから考えましても色々過
去を思い浮かべまして、お話しをし
ながら、あるいはお話を聞きながら、
今後このばんえい競馬の振興発展につ
きまして、参考にいたしましたり、あ
るいは現在やっております施行方法
がはたしてこれで良いのか、このよう
なことにつきましてもひとつ横からな
がめていただいております中で御批判
等をいただければ幸いです。

ございます。

まあ、このようなことで只今からそ
れぞれ本当に今日は気軽にですね。く
だけで座談をしていただければ幸いと
思うわけでございますのでひとつよろ
しくお願い申し上げます。

以上簡単でございますけれども会の
趣旨等を述べまして御挨拶に変えるし
だいでございます。今日は本当にあり
がとうございました。どうぞよろしく
お願いいたします。

内田 では、お手元の資料について若干
の御説明をしたいと思います。

最初に公営ばんえい競走のあゆみと
いうのがありますので御覧いただきた
いと思えます。実は昭和四十三年にこ
の市営競馬協議会ができて、それ
以降のことはよくわかるものですから
かなり書いてあるわけです。四十三年
以前のことはですね。今日色々お話を
聞きながら、そういうこともあつたの
かということに入れることができると思
います。そんなわけで思いついたこ
とをそのまま書いたわけですけれど、
二十三年に道の競馬課ができて、
そして、二十四年に道営のばんえいを
旭川と帯広で各二日づつ開催してあり
ます。その頃の御苦労の話はあとでお
聞きしたいと思えます。大分御苦労が
あつたように思えます。

二十八年に市営ばんえい競走、市営
競馬というものが発足したということ
です。

三十七年に地方競馬全国協会が創立
されて、そこへ騎手免許、馬の登録の
仕事に移った。

三十八年に従来のU字コースから直
線コースに旭川が他の市に先きがけて
これを作った。同時に対面着順判定定
真の採用を先ず旭川がやりました。

三十九年にはそれまで体型区分で馬
の格付区分としておりましたけれども
これを体重制に改正した。

四〇年には丁級の、当時TA、TB
といつてましたけれど、その級の能力
調教検査を旭川から実施し初めました。
現在もずーつとやってきております。

四十一年には道営のばんえい競走は
一応やめまして市の方に全部おまかせ
したということです。

四十二年から地方競馬全国協会の審
判委員が派遣になるようになりました。
この年から古馬も新馬も全馬能力調教
検査を実施するようになり、現在に至
っております。

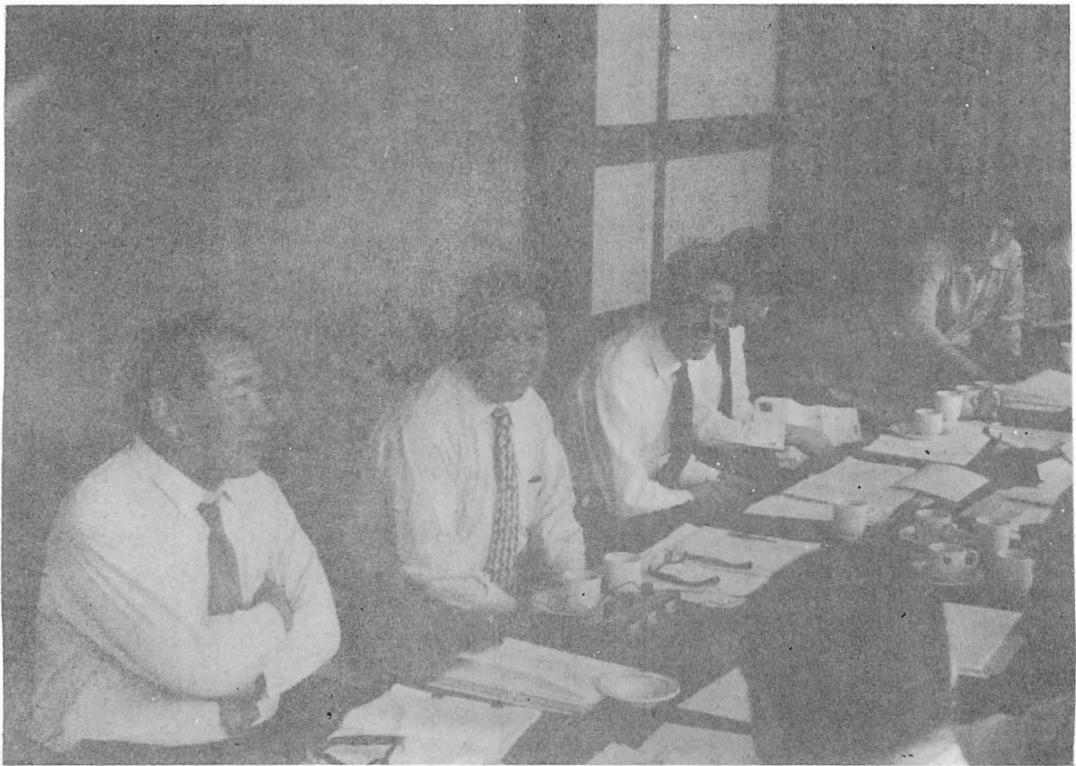
四十三年には競馬場の新設移転を計
画し、これは岩見沢が先ず完成しまし
た。ばんえい競馬は一年も欠かさずに
やっていましたけれど、四十三年には
平地競馬も再開されました。

施設の増改築、これは北見でこのと
し相当やったわけです。その前旭川、
帯広でやっておりましたがここには書
いておりません。それから直線コース
に全市一斉にこれは旭川を除く三市が
やっております。それから四十二年ま

では三日、四日、六日という競馬をや
つておりましたが四十二年から一回連
続六日制の競馬に変えた。また市営競
馬協議会が四月一日に設立されました。
四十四年、対面着順判定写真を旭川
でやっていますが他の三市もこのと
し一斉に採用しました。北見が競馬場
移転新設に踏みきり用地の買収にかか
りました。

ガードマンをこの年から採用しまし
た。騎手の服色を平地と同じように登
録にし、靴も黒の長靴に統一しました。
出走馬の年令制限を十三才以下にし、
騎手会では歴舎自衛委員会を結成しま
した。全協が主体になって制裁基準を
作成しております。VTRパトロール
写真を採用しました。

四十五年には全競走一、二着馬の薬
物検査、尿検査ですね。これをやりは
じめました。第一回審判研修会をやり
まして、これは毎年やって現在第五回
をやることになっています。テンショ
ンメーター、これは重量抵抗を測る機
械ですけれど、これを採用し馬場の重
量を測っております。歴舎管理責任制、
これは調教師の中から、現在七十六名
程おりますがその中から四十名ばかり
選びまして歴舎管理者制度を設けまし
た。特別帽色及びゼッケンの採用、こ
れは特別の帽色をゼッケンにも採用し
て現在に至っております。会報の発刊、
これは先生方にも当初から御送りして
おります。



四十六年には開催回数十二回七十二
日に、それまでは十一回六十六日であ
ったのを四十六年に初めて農林省に改
正していただいて一回増の七十二日を
やるようになりました。鉄製のそり、
鉄製の引木、ドッコイですね。それに
グラスファイバーの梶棒を採用しまし
た。これは北見で一年前に試験をして
おったわけですが一斉に始めました。
スターテングゲートの設置、これは
全国協会の補助で全市一斉に設置しま
した。騎手の重量靴を統一したとい
うこともあります。

調教鉄そり整備、これは調教用の鉄
そり八十台に二万円の補助をして作ら
せたものです。現在は一歴舎に一台又
は数台調教そりを持つています。
四十六年から秋に全国協会の騎手試験
をやつてもらうようにした。これで秋
の終り頃に当落がきまり明年にそなえ
るといふことができるようになります。
又全国協会のリーデングジョッキ
ー賞をお願いして一昨年から授與され
ております。

四十七年、開催回数が十四回八十四
日に、これは農林省の省令を改正して
いただいて二回増していただきました。
四十四年からやっておりますVTR
の一台をスタートの後方にもつてい
ってスタートからゴールまで全馬が見
えるようにいたしました。

競馬場移転新設計画ですが、これは
すでに岩見沢、北見が着手しておりま

して、旭川、帯広も予算をもって具体化し、全市一斉に競馬場移転新設をやるということになりました。

電光掲示板を昨年からはじめました。全協主催の騎手講習会が旭川で開催されました。

最近、非常に産業用馬が激減が続いているので昨年四月、五月に定期総会、助役会議を開き「馬資源対策」というものを立てて推進し第一年目として四才馬レースを新設し、新馬の年令制限を八才以下にし、なるべく若馬を取るようにし、生産された馬が出やすく消流も早くして回転を早めるということとで年令制限をした訳です。

血統証明制度というものはどうも産業用馬、農馬には確立しておりませんので色々問題があるわけです。

この生産対策を進めていく上において、血統証明というものがはつきりしていなければ、現在馬籍もないのでこれを全国一元化して、やりかたを変えてほしいということとを昨年来要望してまいりまして、今年は出来そうかどうかです。

四十八年、開催回数が十六回九十六日に、さらに昨年より二回増で道内で行う競馬としてはこれが最高であろうと思われるところまできました。

ことはVTRを前方からも撮って後方、側面と三方からで審判の助けをしていこうということにしております。体重制格付区分を今年には取得賞全別

の格付区分に変えることにしました。

相当馬が増えて昨年の帯広競馬場は最高六百十数頭あり、各市を合計すると六百三十一頭になり、帯広以外は収容しきれないということで各市五百頭に制限し、調教師に対して厩舎馬房の割当制を実施しました。昨年暮に調べたところでは七百頭を越す予想になっております。一方では馬の増産を促し、一方では制限という現象があるわけでこれらも本日の話題としてあとで色々とお話ししたいと思えます。厩舎管理規則を今年から各市で制定しました。

馬資源対策の推進二年目として新馬の年令制限を明年七才以下に、明年以降は六才以下にする予告をしております。古馬は五十年以降は十才以下に制限することを予告しております。これは先程申し上げました理由によるものであります。

血統証明制度の確立、これは農林省、全国協会にお願いして、全国の産業用馬、農馬の血統証明制度を確立するように全国協会の助成をお願いしているわけです。

祭典ばん馬競走の保存奨励、これは非常に馬が減っておりますのでこの事業をやりまして、祭典ばん馬を保存して馬の動向を調べたいということで、これに副賞を贈り北国の風物として残していきたいと思っております。この事業を始めたわけでありまして。

馬産奨励事業の立案、これは馬産対策の中心をなすものですけれど、そのことについて明日の打ち合せ会から検討を始めたい、血統証明制度の方向がはつきり決まったときにこの奨励事業の内容を一般に公表して馬産刺激をしたい、どのような反応があるか、ということをやっていききたいと思っております。

馬が減っていくということは馬が全然不用になったということではない。はたしてばんえい競走だけでこの産業用馬を維持していけるかどうか、併せて馬の利用状況を利用の面から調査していこうと、馬主騎手さんを頼んで全道の各区域に調査員を設けて、この利用状況を調査しようと思立っております。これも明日市の方と御相談しますので決まれば始めたいと思っております。

以上が公営ばんえい競走のあゆみの概要です。先程もお話申し上げましたように、四十三年以降はかなりわかっておりますがそれ以前のこととはあまりわかりませんので、あとで座談の中でお話しできたいと思っております。

それからばんえい競走累年成績調というのがありますが、これは昭和二十四年にばんえい競走が始まりまして二十七年までは道営でやっております。

入場人員二十四年は回数も少なく六千五百人位だったのが昨年は二十五万人に増加しております。売得金額も

六百五十万円位だったのが五十二億に増加しております。出走頭数は現在の方が少なくなっておりますが、これは小路口君が説明したほうが良いのですが、その当時はその土地その土地で馬が変ったものだと思います。現在馬が多いということは同じ馬が各地を転戦しているわけです。騎手の数も昔の方が多く現在の方が少ないのはやはりその土地だけの騎手が多かつたものと思えます。

四十七年現在の騎手九十三名とあるのは昨年暮免許試験に合格し、今年騎乗出来る人数でございます。

北海道ばんえい競走における発足当時より現在に至る常時出場の調教師並びに調教兼乗騎手名簿、これは小路口君に調べてもらったものですが、ばんえい競走始まって以来現在も騎乗している騎手は十四名です。これを見ましてもまだ乗っているのかと思われる騎手もいることと思えます。

以上が資料についての説明でございます。本日は昭和二十三年道営競馬が発足した当時の佐伯体制が全部集まりました(笑)のどうぞよろしくお願いたします。

内田 それでははじめに佐伯さんからご挨拶かたがたお話を伺いたいと思っております。

佐伯 それではせっかくの御指名でございますので私から口切りをさせていただきます。皆様方には何かと色々なお

話があらうかと思われませんが、一番最初に競馬を担当した関係で当時のことを振り返って見たいと思います。

戦後競馬が復活したのは御承知の通りで、いわゆる進駐軍競馬と称するものが昭和二十二年に行なわれまして、これにつられて戦後競馬法が実施されたといういきさつになってくるわけですが、その当時社会の秩序が大変に乱れておりまして混沌困窮時代に再開ということになったわけです。競馬というものは当時およそ考えの外であったと思うんです。しかし、たまたま進駐軍の指令官スイング將軍が当時馬産課といまして、戦後もしばらく馬産課が続きました。その後畜産課に復活しましたが、その当時の馬産課は沢潤一氏が課長をしまして、私が馬の方の主任をしておいた関係でスイング將軍に呼ばれて指令部で競馬を実施しろという命令を受けたわけですが、これには色々の経緯があったのでありますが、ともかく日本人も戦争に負けて委縮してする必要はないとい、たまたま七月四日が米國陸軍の記念日であるからそれに競馬を行なつてはどうかと云われましたが、すでに戦時中の競馬法は無くならず、戦後に據るべき競馬に対する法律、規程というものがありませんので、そのような状態で大いに馬券を売る競馬を実施することは出来ないと思つて随分と抗弁したんですが、半分おとし、半分すかすようなことで、

それでは上司に伺いを立てるといふことさえもほとんど許されないでその場でお前に命ずるといふ強制的な競馬でした。やむを得ず、札幌競馬場のコース全部に陸軍からの取得ガソリンのドラム缶が埋まつてありましたので、それを掘り出して整地し、一週間位の間米軍の手で直してくれました。そのような訳で七月四日の競馬を実施したんですが、これは道自体がやるわけにいきませんので、北海道馬匹組合連合会にこれの実施を命じた訳です。馬匹組合連合会には当時高木某が居りまして競馬に非常に熱心でありましてこの人がリードして競馬をやつたような訳です。これで一応終つたのだと思つておりますと、続いて十月、十一月にも開催するという兆候になってきましたので、いかに敗戦国の日本であつても法秩序を守らなければならないという所謂役人根性で何んとか進駐軍競馬というものを中止させなければならぬという訳で、あるときは競馬場に乗り込んで数百名相手にその中には「ゴロンボー」もおりまして、その中で孤軍奮闘説得に努めました。ほとんど身の危険を感じるような情勢で悄悄と引き上げてきました。この位自分は孤独を感じたことはありませんで下手すれば叩き殺されるような情勢でした。でもほとんどの馬主といひましても日高の軽種馬をいささか残留している連中にとつては大きなよりどころとなりま

して競馬の復興がこの辺からついたことも事実です。

しかしこのままにしたんではいかに混乱した時期であつてもますます暴力団の巢になるような兆候になりましたので勇を誇して進駐軍の民生部に乗り込みまして、当時の民生部には世界各地に派遣されていた外交官がそれぞれの府県におり連絡役を承わつて相当の人が駐在しておりました。その人に訴えましたところ、この人は幸いにして義憤を感じる外交官だつたものですから直ちにマッカーサー司令部に連絡して、こうした実状を正すような方向にもつていこうと働きかけ、マッカーサーも非常にその意味では日本の競馬に心を砕いてくれたと思ひます。間もなく農林省に命じて新競馬法を実施してくれたのが今日の競馬でございます。この様な訳で新競馬法が出来まして、これをどこにやらせるかということになりまして色々議論されましたが、馬に関する団体はすべて戦犯団体という刻印を押されて、なかなか決着が付かなかつたのですが、ようやく馬匹組合をしてこれを実施させることになりました。北海道は馬匹組合連合会がこれに當つたという訳で二十二年から始つたといふことです。

その当時その仕事に當つたのが内田君が筆頭で瀬下君も室蘭に居て協力するといつたお働きでした。

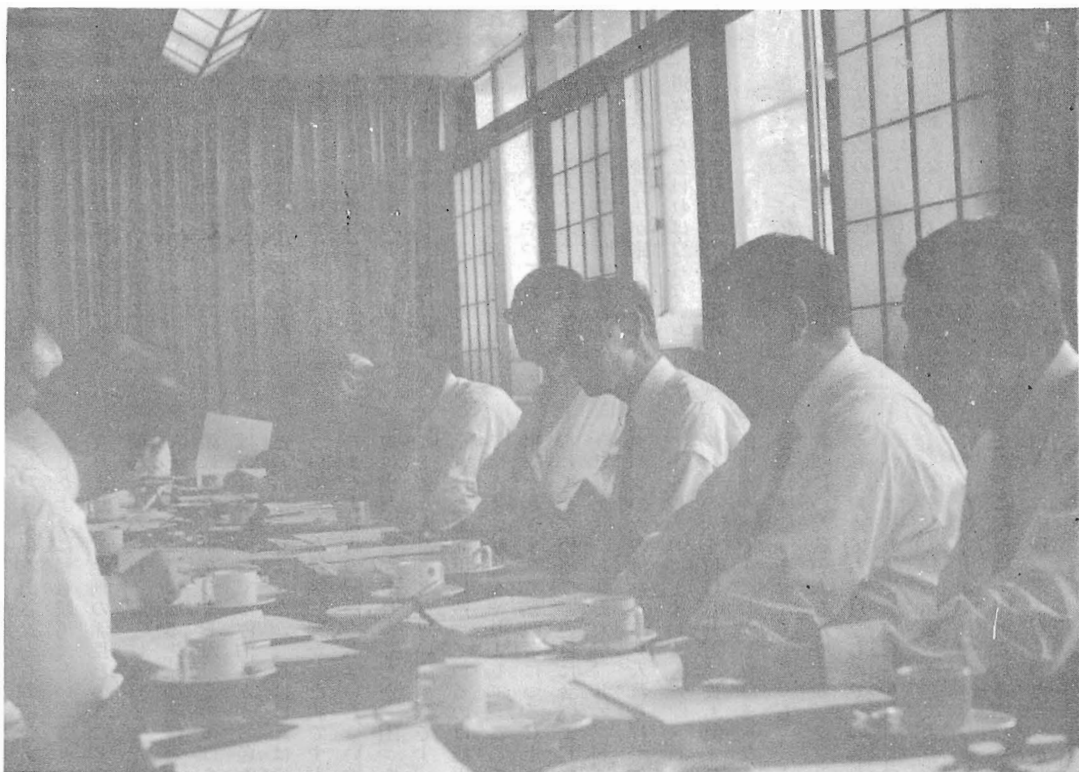
私も道を辞めて馬匹組合連合会に御

世話になり競馬を実施するといつた体制になりました。ところが馬匹組合連合会は軍馬を作つた元凶であるとし、マッカーサーにより全国の馬匹組合は解散を命じられ競馬を実施することが出来なくなりました。そのかわり各都道府県に実施させる体制に變つたわけです。それで再び北海道庁に逆戻りし競馬施行の任に當り競馬課長を拜命したわけでした。

今から考えて見ますと皆様と大変苦労しましたが、これが官制競馬で発足したことが今日のプラスになつたと自覚しております。というのは御承知の様に戦後の混乱時期で県下の暴力団が横行しておりまして、それが競馬に従事する者の先づ身を挺しての仕事だつた訳ですが、一応「官」という権力をひからかしてこの仕事に當り身を挺してやつたという実績が今日のような、競馬の秩序を打ちたてた「元」だと思います。これが民間団体で持続しておつた場合には暴力団との結びつきと云いますか、因果関係でなかなか今日のような秩序ある競馬を持ち得なかつたと深く信じております。

いづれにしましても過度期に我々がその任に當つた訳であります。随分と内田君をはじめ瀬下君、安達幸三君等が皆ひどい目にあつて努力したこと振り返るわけです。

そこでばんばん競馬のことですが、北海道は平地に加えてばんばん競馬を



やるように仕組んだわけですから。これに
つきましては農林省と打ち合せをいた
しまして、ばんえい競馬とは「何じ
ゃ」ということでそんなものは競馬に
取り入れることは色々問題だと、な
かなか承知してくれなかったものであ
ります。

ばんえい競馬と云おうか馬力競走と
いうものが北海道、青森にありまして、
非常に残酷な馬の引張り合いをやつて
た時代ですから、それを競馬に取り入
れるのもつての外と云われるのも無
理のない話ですが、しかしこれを合理
的に系統付けて競馬に取り入れる献立
をしてくれたのが先程も申しました様
に、内田君や瀬下君、安達幸三君等が
苦心して現在のばんえい競馬の当初の
規定を作ったわけですから。これが非常
に合理的に出来たと思いますが、今日市
営競馬になってからの色々の事績を聞
いてみますと益々大きな進歩を遂げて
いることに驚くのであります。当時と
しても漸やく農林省を説得するだけの
体制付けが出来まして発足しました。
しかしやっっている間にも色々改正を
加えましたが、しかし、私かえり見ま
するにこのばんえい競馬を北海道の競
馬に採用したことは非常に画期的なこ
とで、しかも今後の国内の馬の流れ、
馬の奨励という面から見ますとこれ
が基本になつてくるということは真に
画期的なことだつたと思います。

この競馬が産業と結びつく無理な理

屈を立てて現在平地競馬の奨励が行な
われておりますが、現実において産業
と結びつく競馬はばんえいを置いて他
に無いと信じております。これが今後
日本の国内に馬がだんだん影を潜めて
今後馬の将来というものはどうなるか
と、色々追求してまいりますと、過日
も東京で内田君はじめ皆様と一べい飲
みながら語つたのでございますが、こ
のばんえい競馬をしましてばん馬とい
うものが今後の日本の産業用馬として
の根幹をなす、又奨励の中枢をなすに
至つたということは真に感慨無量のも
のがあるわけです。後程又そのような
問題が出てきましたら充分申し上げて
見たいと思ひます。端的に申しますと
今後の日本の農政はうんと転換して原
点に帰らなければならぬ時代が必ず
来ると思ひます。いかに機械が進みま
しても燃料無くしては機械の動かしよ
うが無いという時代が間もなく来ると
思ひます。こうした時代に日本の辺地
輸送、農産物の根幹をなす馬力を除いて
日本の農産物というものは無い。農政と
いうものは無いというくらいです。こ
ういうことを申し上げますと、現在の
農政の中枢は氣違ひ呼ばわりすると思
ひますが、これはおそらく目に見えて
来ると思ひます。その点ばんえい競馬
が今日までの発展を遂げて、今後の農
産と馬産との結びつきを重大にもち始
めたということは非常に愉快に思つて
おります。今後の御発展を祈りたいと

思います。

内田 ありがとうございます。それは進藤さん、何か思い出がありましたら、お話しただけませんか。

進藤 後程の座談の時に話しますので。

内田 では安達さん、何かばんばのこと思い出がありましたら、どうぞ。

安達 今佐伯さんから色々とお話がありました中に、競馬の経過をお話していただきましたが、私最近全く仕事を離れて頭の中を空にしております、しかし今お話を伺いまして昔のことを今思い出したこともありましてその話をしてみたいと思います。私、道には終戦後ほんの腰掛けのように入りましてそれがたまたま畜産課で今でも思い出しますが、富加見さんがやっておった仕事の補助ということで入った訳です。そして御手伝いした中に頂度先程お話がありました、競馬法が施行になりました、道がやらなければならぬと云うことでたまたま私の仕事を領りました。

そして道でやることになりました。競馬課の設置の立案というようなものを草案した記憶を改めて思い出したような訳です。それによりまして競馬課を作るのに何を考えなければならぬかと云うことで、先ず第一に競馬と云うものは色々むずかしさがあるので人材を揃えなければならぬと考えまして人材を受け入れやすいような、要するにベテランを出るだけ集めるよう

な体制にする気持で草案を作ったという記憶があるわけです。それが発足しましたら先程内田さんから御紹介になりましたように私も競馬ということになりました、企画の係長ということになりまして、企画の係長ということになりまして、競馬に頭を入れることになりました。

それからここに居る先輩の皆様と一諸になり仕事をしました。その後ばんばの経緯については佐伯さんから色々とお話がありましたが、私はばんばについて大した経験も無かった訳ですが、たまたま競馬の關係でちよいちよい地方に出たことがありましたが、困ったこと苦しんだことを思い出す訳です。それは一番記憶に残っているのは旭川でばんばい競馬をやりました、ここで事故が起きまして私観衆につるし上げられて相当ひどい目に会いました。今でも記憶にあります、ポケットにタバコの火の付いたのを入れられポケットを焼かれてしまいました。又首にタバコの火を付けられどうにも気まりが悪かったです。しかし私はそんなことには屈服しませんでした。もう一人着順にいた若い人なんです、ファンが私を責めても駄目なものでその人を責めた訳です。しかしその人も頑張ってくれまして私も頑張りました。よく終った訳ですが、私懲り／＼しましたのでこんどは内田さんに連絡して内田さんに応援に来てもらったりしました。

その後道に帰りましてこの様なトラ

ブルが起きる様な行き方では困る。もし旭川で競馬をや、又事故を起こしてはいけないと思ひまして、次の競馬を中止する様に云いましたが、なかなか聞き入れてくれませんが、財政課もいくらかの予算が有ったものだから聞き入れてくれなかつたようですが、財政課を説き伏せまして競馬を中止してもらった記憶があります。私ばんばでは自分の苦しんだだけが記憶に残っているんです。ばんばのことについては佐伯さんも帯広で大変な目に会われたんで記憶にあると思いますが、

(笑)過去に色々苦しみがありません。

しかし今日この表を拝見しまして馬が段々減つてきておるようですが、実績は非常に伸びていることは運営そのものが非常に改善されてきているし、又ファンも非常にふえて来たこと云うことでばんばの興味と云いますか良さが出ていると思ひます。私これにはどうこういには及びませんけれど、この表を拝見して非常に愉快に感ずる次第であります。

内田 では次に高瀬さん、何か一つ思い出ありませんか。

高瀬 ほんとうに昔の思い出ですが、投票に関する話をしてみたいと思ひます。

終戦の年に釧路の支庁を辞めて畜産組合におりましたが、昭和二十二年の二月か三月に安達三三さんが私の所に手紙を寄こして、今度馬連で競馬をやるんだが、君来ないかと云うことがあ

りましてそれがきっかけで札幌に帰って来ました。その当時は家族はまだ釧路でした。確か四月の初め頃だったと思いますが、日本馬事会の矢野さんが、投票の矢野角市さんですが、講師として来られて投票の講習会を札幌の競馬場で開催しました。二日間の講習だったと思ひますが、角田さんも出席なさっていたと思ひます。矢野さんから色々詳しい説明を受けたのですが、なにしろ競馬そのものが判らない投票も初めてなもので、書類の数ばかり多くて弱りましたが、何んとか講習会が終了しました。

その後岩見沢で第一回の競馬がありましてその時馬事会の藤崎さんと云いましたか、その人が投票に来られて先頭になって運営されたこと云うことでございますがこれが投票の仕事の始まりだったと思ひます。平地競馬は投票関係ですが、当時連勝式が始まってまして旭川では組合の湯浅さんが競馬に関心を持っていて、先に立つてやっておられましたがその人の意見もあり又十勝の富永さんの意見もあり、ばん馬については当分連勝式はやらん方が良いだろうと云うことで皆と相談して決めました。

単勝式と複勝式よりやらなかつたこと云うことでございます。平地競馬では連勝式が六割七割も売れていましたからばん馬では単勝式と複勝式だけではどの位売れるか想像がつかず、又窓割

にも色々苦勞しました。

話は変わりますが、馬連時代の当時二日間やりまして昔の天長節の日も入っていたのですが、非常に売り上げが悪く(二日間で九〇万円)ばん馬競走をやる前には地元組合の方で赤字になった場合には穴埋めをしてやると云う話だったので。しかしやって見たところ二十数万円の赤字になりました、その当時穴埋めをしてやると云った人が競馬が終わったらどこかへ行って姿が見えなくなつたような(笑い)こともありました。このように当時の競馬は売れなかつたのが事実でした。ばん馬については比較的投票に関して市営競馬は問題は無かつたと思いますが、道営競馬では色々皆様に御迷惑をかけたことがあります。投票についての思ひ出はそのようなことです。

内田 どうもありがとうございます。

又後程お話を伺うことにして次に瀬下さん、一つ色々あると思いますのでお願いいたします。

瀬下 それでは皆様のお顔を拝見し、ばんえい競馬のあゆみの話等を伺っているうちにばんえい競馬の発足当時のことが今更のように思ひ出されてなりません。もと／＼この私が競馬に携わるようになりましては不思議な縁でありまして、又ばんえい競馬に携わるようになりましてのも真に妙な話であります。私は何もばんえい競馬に対して大した経験ありませんでした。

ばんえい競馬が競馬法による競馬で発足しました当時、色々な論議がございましたがはたして競馬法による秩序ある競技として、競馬として発足可能なものかどうか、ということはその当時から自信があつた訳ではありません。

現在の旭川市長のお父さんの五十嵐さんが、当時ばん馬組合の組合長さんをしておりまして競馬には色々準備が必要だろう、これに対しては一切地元の旭川で引き受けるから何の心配もいらんと云うことになりました。

いよいよ競馬法によるばんえいが発足することになりました、実施条例等の事務的な仕事には参画しませんでした、今になって考えますとばんえいの決勝線の決め方を馬橋の後端と定めたと云うことも殊更平地競馬から考えたら真に奇妙なものでございまして、当時決めたことも絶体的根拠というのは、今では成り立ちますが当時は絶体的根拠はありませんでした。ただ普通一般にお祭りばん馬の慣習としまして線を引かまして、その線を持ち切つた時をゴールインとする、云うものがありましたのでその方法がいじやないかと、今になって考えますと鼻端でとらえるには決勝線上で止つたり馬が力を入れたり抜いたりして出たり入ったりするので、現在は写真の判定で見られるように科学的に分解できるのでありますが、当時は理論も無かつたのでしたが、そのような慣習を用いるこ

とに決めたこと云うことです。

当時はこの理屈が判らないと云うことで、農林省からこんなつじつまの合わないものを条例で決めるのはけしからんと、随分お叱りを受けましたが、とにかく馬鹿の一つ覚えで、がむしゃらに通しまして当時第一回のばんえい競馬を馬連でやることになりました、地元で一切を引き受けると云うこととございましたが、馬連自体から責任者として行かなければならないものがあると云うことで全般的なことにか

く技術面については瀬下お前は昔渡島に居たが、あの辺はばん馬競走が盛んだつたのでばん馬を良く知っているだろうからお前が行つて地元の人協力ややつて見ろ、と云うことで何も解らない五里霧中な者が單身旭川に行きまして、地元のばん馬組合を中心にして現在の協力会の方々と打ち合せをお願いして色々とお聞きしたのであります。

今から考えますと真に冒険そのものです。用具も一式揃つた物もございません。襦も農用の荷そりをそのまま借り上げ、手綱も全部手持ちの物です積載する重量も「カマス」を持って来て馬場の中の砂を入れそれを秤にかけて重量を計りました。雨が降つたら濡れた砂がどれ位増減するかと云う心配もありましたが、マア／＼と云うことで全くの無我夢中で発足したのであります。

当時はたつた一日の競馬だつたと思

います。終つてみて皆様が手持ちの弁当、手持ちのお酒であの会館で慰勞会を開き万才を叫んだ時は、全く今更のように思ひ出されてなりません。

あの当時の発足が今日のような隆盛なばん馬のスタートだつたと考えるとまったく、ただ／＼感慨無量のものでございまして、よくもあのような大胆なことが出来たものだ、当時の体制から見れば自分の経験から技術から申しまして穴があれば入りするような気持ちでいばいでございます。

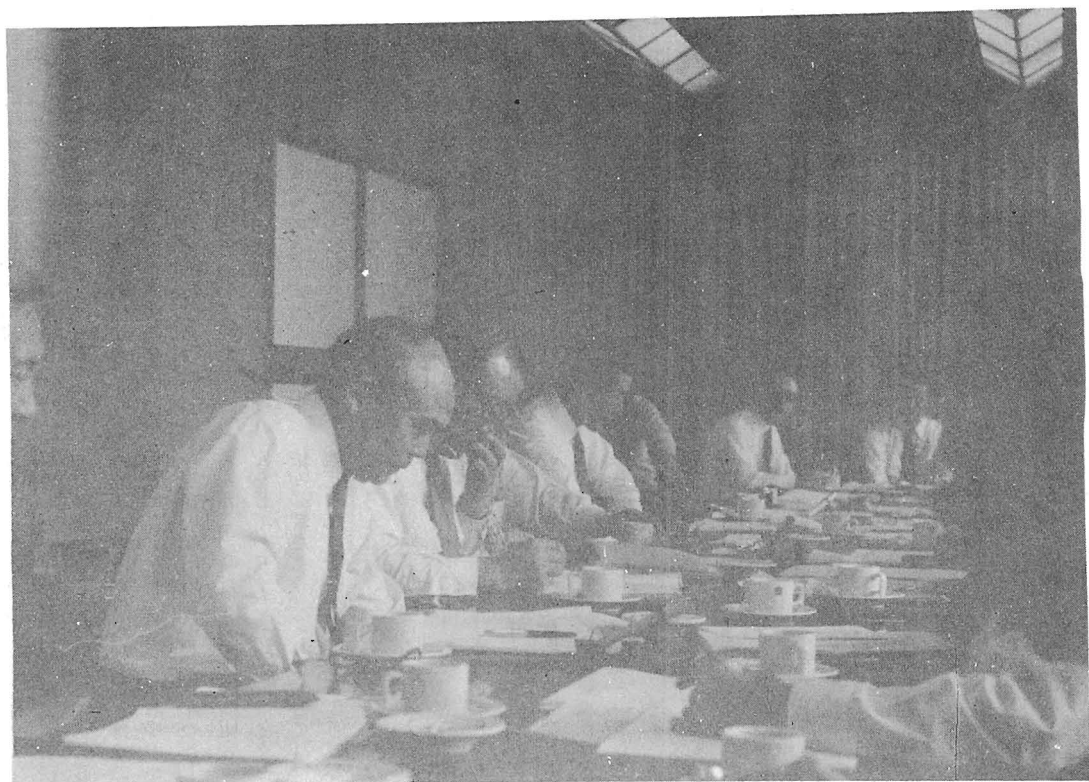
内田 ありがとうございます。では次に竹森さん、一つお願いします。

竹森 たしか二十四年だつたと思うんですがはつきりとは云えませんが、当時競馬が一週間でありまして平地を四日ばんえいを三日と云う記憶があります。

瀬下さんが先程云つてました様に協力会が馬橋の借り上げをしました。その時は協力員が二日間位掛かりまして市内及び近くの町村の農家をお願いして歩きました集めたものです。

そして馬体検査協力員と云うものを設けまして、体高、胸囲、管囲皆測りまして甲、乙、丙、丁と馬体を分けましたが、すべて協力員がやつたものです。

その当時面白い話があるんですが、馬橋の後が長いと短いのがあつたんです。借りて来たものだから、同じように決勝線に入つても尻の長いと短いのがあつた、どうなつて



と暴力団なんかにいじめられた訳です。これは参考ですが、二十四年に協力会に助成してもらったのですが道で十万円、市で二万円、上川生産連で一萬五千円、合計十四万円位の予算で、馬櫓の借り上げ馬体検査等ほとんど協力してやったものです。そういうことで現在に至ったのですが、現在は当時より大分楽になっていると思います。まあ、以上がその当時の思い出でした。

内田 ありがとうございます。それは荒木さん、何かありませんか。荒木さんは平地の方が随分詳しいと思います。

荒木 御指名いただきましてありがとうございます。でございます。

私卒直に申し上げますと今から二十数年前ですが、ばんえいと云う言葉すらめずらしい言葉で、馬櫓競馬とか云ってたんですが、はたしてこれが競走かと疑問を持ったことがあるんです。

やはり平地が先程佐伯さんからお話がありましたようにスイング小将が道民の士気高揚の為に、いつまでよくよしても仕様がなからやれと云うんでやった。それがあまり華やかなためにばん馬が馬櫓を曳いて走ると云うことを私達は奇異に打たれた時代もありました。御承知のように当時岩見沢は炭鉱が隆盛を極めた時代でありまして坑内から石炭を引張り出す運搬の作業は馬力に頼るしかなかったために非常に馬力の強いばん馬が沢山おりました。

そう云ったことで先程からお話にありましたようにお祭りの余興競走として平地を走つたような競走もありますし、それから今のように馬櫓を曳かして走つた競走もあつたことを承知しております。これが国の要するに認定の基に競馬法によつて馬券を売つてやらせるんだと云うことで、平地競走が多回数指示を受けましてどんどん発展し、それにつれてばんえいも付いて行つていく間に、非常にばんえいの良いところが認められて、そして最初は一日か二日と云うのが平地競馬と同じような開催日程を持つまで発展したと云うことにつきましては私は今更ながらばんえいを軽く見たと云うことで恥かしく思っております。私は岩見沢市に競馬と云いますか、馬を走らせてそれを楽しむと云つたような催しが持たれてからちようど五十年たつたので、去年おかげ様で五十年記念式典をやらしていただきました。本当にばんえいをこの様な考えで過ごしておつた私共が良い意味での期待を裏切つて、この様にりっぱなものになつたと云うことは今更ながら感無量のものがございます。

これはひとえに歴代の道の担当の課長様、それを補佐した各係官殿のたゆまない日夜の研究、努力と、かように考えております。ばんえいにつきましては私岩見沢としましても面白い裏話がございますが、一応ばんえい競馬に對する私の感想はこんな感じですよ。今

はもう本当に「シャツポ」を脱いでお
ります。

内田 どうもそれでは又後で、では大原
さん、お願いします。

大原 競馬法によるばんえい競馬という
声を上げたのはたしか帯広が一番早い
と思うんです。これは大正年代に札幌
競馬クラブで馬券を売れなくて、五番
館の商品券で景品を出しておった時代
ですね。私深川の相馬神社でお祭り競
馬として競馬をやりその当時五十銭の
馬券を売ったもんです。私は二十代で
元氣いい頃でした。それから昭和五年
頃新得に移りましてある時馬関係の話
から進みまして深川でやったんだから
ここでもやって見ようと云うことでた
またま警察署長がとても親しい人だっ
たので署長に話をしそれをやろうとい
うことになり、新得、御影、清水、鹿
追とその辺全部五十銭馬券をやりまし
た。それから昭和十一年頃帯広に行き
まして二、三年程経てからばん馬競走
をやるうじやないかと云うことで、実
は帯広には古くから役馬愛護会と云う
のがあります、畜連の競馬時代から
競馬がすむとすぐに続いて地引きとか
尻引きをやったりして人気を持ってお
りましたので、何とか馬券を売る競馬
をやってみようじやないかと云うこと
になりました。その年大水害がありま
したので警察署長に話し当時としては
大金で水害見舞いとして二万円寄附す
るから小さい馬券なので黙認してくれ

と頼みまして又なるべく制服でなく私
服で来て陸ながら警戒してくれるよう
にも頼みました。暴力団や香具師が
入るので地元帯広の親分で大内と云う
人を場内取締りにし、競馬場前の共進
会場でその当時の畜産組合で競馬に経
験のある連中でマイクを使い大騒ぎで
やりましたので相当な利益がありました
た。その後農林省から調査に来ると云
うことになりました、私頂度内地に行
かなければならなかったので農林省の
人が来たらうんと飲まして歓待してや
つてくれと頼んで行つたんですが、帰
つて来て「どうだった」と聞いたところ
巧くいっただと云うことだったのです
がしばらくして、裁判所から呼び出し
がありました。役馬愛護会の会長が奥
野さんでばん馬組合の山さんと私が副
会長でやってんですが、奥野さんは大
原君と山君に任かしてあるので内容は
良く知らないと言つたんです。裁判
所でも民間からの告訴であれば何とか
方法があるけれど、農林省から告訴し
てきているので目鼻を付けなければな
らないので一番軽く千円で我慢してく
れと云われました。

競馬法違反で罰金を取られると競馬
の馬主になれないし、又役員にもなれ
ないと云うことで山さんは服罪したけ
れど私は異議の申し立てで弁護士を頼
んだら一万五千円掛りまして執行猶予
になりましたよ（笑い）。農林省も酒
を飲んでる時はこれは悪質で無いか

らと納得してくれたんだが後で女を世
話するのがうまくいかなかったのでそ
れでむくれて帰つてすぐ告訴したらし
いんだね。これだけの問題を起したん
で二度と「もぐり」ではやれない。何
んとか馬券を売れる競馬をしなければ
ならないと云うことで、後年課長にな
った佐伯さんにどうしてやらんのだ、
利益があつたら持つて行けば良いし、
赤字が出たら地元協会の引き受け
るからと随分失礼なことを云つて頼み
ました。その内に永山の品川さんが来
たりして幸いに出来たと云うことで、
市営競馬が出来る前の年の話ですが
北見の伊谷市長の音頭取りで当時の自
由党の党主である大野伴陸さんが来る
からと云うので当時は六市で競馬をし
てたもんですから六市の人を集めたん
です。関係の市議会議員と競馬担当係
をですね。

そこでの大野伴陸さんの話では一市
百万円六市で六百万円を党に献金すれ
ば競馬を許可してやると云つたんです。
そのほかに一市三十万円を出せ、これ
は運動費で合計一市百三十万円を出せ
と云う話を聞いて大体承諾して、帰つ
て来て当時私等は畜連時代から競馬振
興会と云うものを作っておりましてそ
の役員会を開き献金の話をしたら、も
つてのほかだ、日本で初めて競馬をや
るとか、ばん馬をやるのであれば献金
も必要だろうが内地でも、既にやって
おるのに北海道だけ出す必要は無いと

云うことになり献金を止めたと言うこ
ともありました。

その後色々ことがありまして思い
出されるのは協会の役員が、俵に砂
を詰めて重量物にしておりましたが、
何者が夜中にその俵の砂を取つてト
ーキビの殻を入れたのが二俵ありまし
て、さいわいそれを見つけて取り除い
て無事に済ませたこともありまして当
時佐伯さん達には「やんちゃ」を云つ
て迷惑をかけた思い出等があります。

内田 ありがとうございます。では沢
田さん、どうぞ。

沢田 北見の場合はばんえい競馬の当初
は面白くて良かったんですが、市営ば
ん馬に切り変つた当時非常に馬が不足
しておりまして、中村清信さん達と馬
体検査の前日にも馬を募集して町村を
歩いたのが印象に残っています。

馬が足りなくて、勧誘して廻つた
時代と今の現状から見ますと今更なが
ら大きな変化があつたものだと、当時
のことを思いまして感無量です。

(以下次号)

ばんえい競走とは

どんな競走か (3)

内 田 靖 夫

北海道市営競馬協議会事務局長

まんが うちだやすお

一 北海タイムスコラム「亜寒帯」の批判にお答えする。

1 批判をいただいて

昨年八月十五日帯広のばんえい競馬で騒ぎがあった、翌々日の北海タイムス第一頁のコラム「亜寒帯」に、競馬に対する批判がのった。

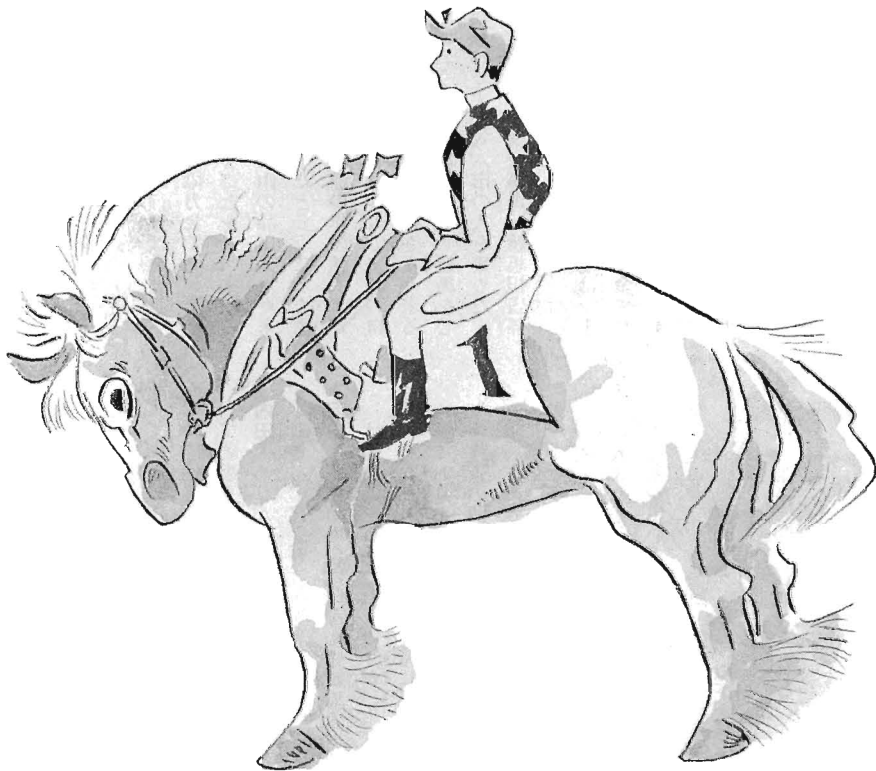
最近競馬に対する世論は大変厳しく、その記事もそうした批判の一連として、我々実務にたづさわるものは、襟を正して熟読玩味した次第である。

今こゝにその記事の中のばんえい競馬に関係しているとみられる箇所を再録して、指摘されている事項について、どの

ように我々が考えているかを述べてみたい。

(亜寒帯) 四七、八、一七

前畧「しかし八百長というやつ、騒がなければ素通りしそうなところに問題がある。公営ギャンブルの是非はともかくやつてる以上は、レースの公正を守るのが鉄則だろう。それは本モノの八百長はもちろん、八百長とまぎらわしいレースをはじめから締め出すことだ▼たとえば道営競馬には、つい先ごろまではけい競走というのがあった。馬に騎手の乗った車を引かせ、強い馬と弱い馬では十米から二、三十米ぐらいの距離ハンディをつけてスタートさせるのだが、これは八



百長自在というレースであった。廃止するのが遅すぎたともいえるが、同じことはばんえい競馬にもいえるだろう。重い荷を引かせて坂を越えさせる、手綱のたつき方で八百長自在だが、見分けがつきにくい、もう一つ、動物虐待という意味でも、こんなレースは廃止すべきだろう」

後畧
2 判らんようなレースはやるべきでない

「ほん物の八百長はもちろん、八百長とまぎらわしいレースは縮め出すことだ」とは正に大賛成、そのとおりである。

私は昨年この会報にこう書いた。

「かつて私はばんえい競走というものは、競馬の競走として大成するものかどうかという点に疑念を持っていた。そのことは専門家等しく考えていたことである。

それは競走中停止して息を入れるという特殊なレースにある。もしその停止を利用して不正が行われたら、それを看破する手段はあるまいという疑問であった。五年前ばんえい専門団体の職員として招かれた私には先づ第一にそれを説明する使命があった。

それが説明できなければ、私は何年かあとに速歩競走と同じようにはんえいは廃止すべきであると進言して職を辞すべきだと考えていた。

説明もできないで疑問のままに便々として席をあたためていることは許されるものではない。」と。

更に亜寒帯は

「道営競馬にはけい競走というものがあって八百長自在であった。廃止するのが遅すぎたともいえるが、同じことはばんえい競走にもいえるだろう」とある。八百長自在の競馬であるとしたら、主催者はころがりこむ財源にばかり気をとられて、あとは知らぬ顔の半兵衛さんを引きこめていこうとする。

ばんえい競馬の厩舎はサギ師の集団ということになる。

審判委員は一本足の案山子のように、めくらつんぼのデクの手ということがある。それならば即刻この競馬は廃止すべきであることは当然である。それほど大きな、下品な公害はないからだ。

3 やっている者にも良識はある

しかし我々はこの批判に対して「ナニをい、ますか」とケツを捲くって抗議するワケにもいれない。残念ながら競馬にはまま不正事件が発生しているからである、ただばんえい競走にそれが多いということは全くない。

他にあったような大型の八百長事件や露骨な不正事件は、まだ一度も発生していない。それは八百長自在で発見しにくいからだという人があるとしたら、大変な研究不足であると思う。

やはりその疑問は競走中に「とまる」という特殊なレースにあると私は思う。今もそういつて来る人は少なくない。

「レース中」とまる」という競技は他にないようだが「とまってよいのなら」それ

を利用して不正はいくらでもできるではないか、そのとまり方が不正であるかないかという見分けはとてでもできるもんではないかという疑問だと思ふ。

4 けい競速歩と比較してみよう

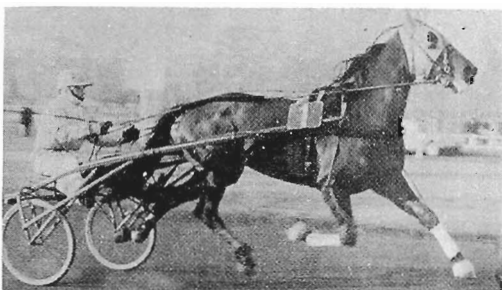
この競走が廃止になったのは、全体の頭数が少ないため、強弱の能力差の大きい馬を一諸に走らせなければならなかったこと、審判がむつかしかったことにあった。

けい競走ではハロン上下二秒位の差のある馬が一諸のレースで走ったから、大変な能力の差があったのである。例えばそれは一八ロント七秒で走る馬と十九秒で走る馬とが一諸に走っているようなものだから、二〇〇米では二二米余の差となり、二千米の競走なら二二〇米のハンデをつけてもよい計算になる。馬は機械でないから計算どおりいかににしてもそんなに差のある馬を一諸に走らせることは、逃げ切るか掴まるかというレースとなり根本的に無理があったのである。

米国や濠州のようにけい競速歩を盛んにやっているところでは、ハロン十五、六秒で走る馬が一万数千頭もいて、レースに出る馬の能力差は上下〇・二二五秒きざみというから二秒間では十六階級に分れてレースが組まれることになる。これでは全く互角の馬が勝負するわけで、一度歩様をくずせば入着圏外に落ちてしまい取返しがつかない。

我が国において速歩競走を存続させるかどうかという問題の中で馬が少ないことは致命的であった。もう一つの廃止理由は審判がむづかかったことである。

「口にいえば「馬が全力で走るときは駟歩になる。速歩はその一歩手前の歩様で、駟歩にならないように或る呈度セーブしたポーズをとる。そのため全能力を出しているかどうかの審判がむづかしい」そのほか歩法の制限が多く、五〇米以上駟歩をしたもの、五面以上駟歩をしたもの、一回でも有利な駟歩をしたもの、斜対で走る馬が側対で走ったとき、側対で走る馬が斜対で走ったとき、後肢駟歩（トモキヤンタ）で走ったとき、それらの歩法でゴールに入ったとき、すべて失格となるのだから審判委員は歩法審判に

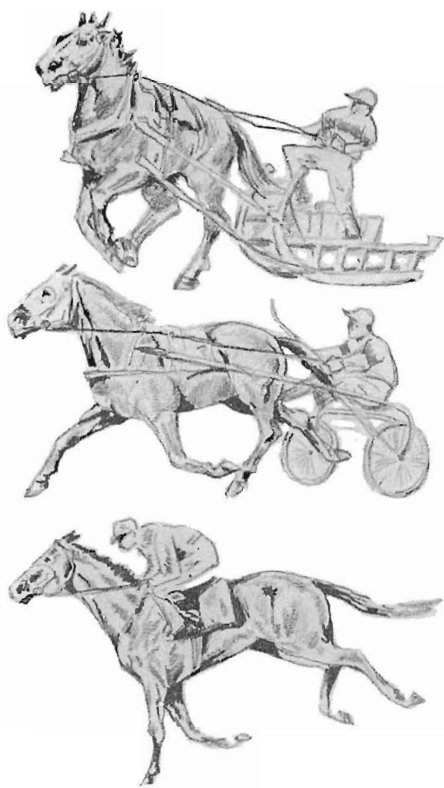


騎手は或る程度セーブしたポーズをとる

追われてイヤというほど苦勞する上に、平地同様進路のとり方その他の審判に神経をすりへらしたのである。

中央競馬では速歩競走となると、馬一頭に一人の審判員をつけたので、三十四頭以上の馬が出ると、三十人以上の審判員が必要であった。

そのように主催者は速歩競走の公正のためにあらゆる努力をしたが、満足すべき結論に到達することができず、先づ中央競馬が廃止すると、大きな柱を失ったように地方でもやめてしまった。



ばんえい競走とは歩法の制限がない

ばんえい競走には歩法の制限がないから騎手はあらゆる技術を駆使して、のめるまで馬の能力を出してもよいのであるそこに大きな相違がある。

競走の公正を期するためには、ただ審判委員だけの技術に頼っているだけでは不可能である。すべての開催執務員が夫

々の分担において、任務を完璧に遂行し特に厩舎側が精神と行動の面において真摯な態度で競走にのぞみ、ファンにこたえることがなければならぬ。

だが「八百長自在」とは目の前でナニをやられてもわかりっこないということだから、これは審判の問題である。

5 平地競走と比較してみよう

ばんえい競走の「とまる」ということは、平地競走の「ひかえる」ということと同じである。

「ひかえる」ということは別に又「ためる、おさえる、ひっぱる」ともいわれているが、通常スタートダッシュ後一〇〇米から二〇〇米位のところでひかえ目にし、他馬との関係を考慮しつつ時には歩度を早めたり押さえたり、好位置につけ適

当な距離（俗に三分三厘あたり）から仕

掛け、追い込むという戦法をとる。

この場合仕掛けてから追込むときの騎乗ぶりは全身の動作が大きく、誰でもよくわかるが、向正面を一团となつて走っているときの操作は微妙であつて素人にはよく判りかねる。

日本最高のレースであるダービーはテレビで全国に放映され、望遠レンズの撮影なので、レース経過が手にとるようによく判る。しかし二十数頭三十頭という一団の中で、サア前へ行つた内え入つた外に廻つたひかえた早めたということはよく判るが、騎手がどのような扶助で、どのような操作をしているかは正に微妙

であつて素人にはよくわからないと思う。

ここで一つ問題を出してみよう。

この馬の走っている画は平地競走であるが、どこかに間違つたところがある。

すぐお判りの方はだいが玄人である。一寸考えて判つた人はさすがである。よく調べて判つた人は将来見込みがある。

サテ、ばんえい競走では既におわかりのように、とめる動作と追う動作がハッキリとしている。

先づこの平地の「ひかえる」「早める」動作と、ばんえいの「とめる」「追い出



無理にとめておれば馬はいらだつ

す」動作とを比較すれば、ばんえいの方がよく判るのである。

馬はあせりにあせて自ら動き出す場合のほかは、騎手が車に立っているだけでは動かない。何等かの動作が必要である。その動作の変化はどんな素人でも容易にわかる。

その簡単な一例をあげると、一昨年来一、二四五レースについて、第三障害前で息を入れていた時間を計測してみたがこの仕事を女子従事員にさせたところ、三レースばかり教えこむと、もうとめたときと追い出したときの判断ができるようになる。それは馭法動作が大きくハッキリしているからである。

6 とまる場所はきめられている

レース中騎手の意志で「とめて息を入れてよい場所」は平場レースの場合第三障害前だけに限定されている。それ以外では馬がのびて自然にとまる以外、騎手の意志でとめることは禁ぜられている。

騎手の意志でとめたか、馬が自然にとまったかはほとんどのファンがよく知っている。少しでもばんえい競走を知っているファンなら馬が停止したからと言って騒ぐことはない。

真剣勝負たけなわのゴール前、馬が力つきてとまり、他馬を抜いてとまり、近づいてとまり、という熟戦にファンの歓声は湧きにわく、それがばんえい競走の醍醐味かもしれない。

第三障害前の息入れ時間は四秒から九

秒位が適当だとしている。それはその時点の呼吸数とほぼ同数である。

四秒から九秒というと平地競走の感覚で考えると、とんでもない長い時間に思えるが、ゴール時の一馬身の通過時間、(馬のハナ先がゴールに到達してから橋の後端が到着するまでの時間)は二秒から八秒であるから四秒から九秒というのは大体一馬身の速度である。

平地競走の一馬身(ハナ先から臀端まで)の進む時間は〇・五秒から〇・二秒であるからその〇倍から四〇倍だと思えばよい。しかし他馬との関係、重量馬場差などで若干の相違がある。

7 ばんえい特有の馭法

今回は「とまる」という点に焦点を置いて述べたが、そのほかばんえい競走の馭法動作には騎手の癖というか、個々の動作があつてこれを熟知しておれば丹念な記録と照合して、追っているかいないかの判定はそう困難とは思われない。馭法動作の大きいもの、ほとんど動きのないもの、特に追い込むとき、接戦のときその独自の動作は激しく現れる。それがその騎手の全力馭法のポーズである。ばんえい競走の騎手は九〇余名、そのうち各場を廻るいわゆるプロは七〇名位である。この連中の動作を頭に入れてしまうのが審判のコツである。

平地競走の騎手は全国で一四〇〇名位だから、その一人一人の騎乗癖を記憶することはむづかしいし、その必要もない平地競走の騎乗法は優秀の差はあれ、ほとんど定型であるから、始めて審判専門職がその場に臨んでもやれるのである。

8 紛争レースはどうだったか

先づあのレースを回想してみよう

出走馬と騎手と勝馬予想(七頭立)

- 1 ワカテンリュウ 晴披△ ×
- 2 トーオクオー 山田×●▲
- 3 ガロン 広富 × ×
- 4 ノーチカル 大友
- 5 コマヒカリ 水上▲○○○
- 6 欠
- 7 バイラク 岩七●×△●
- 8 ヤマトオーザ 岩七●○○○

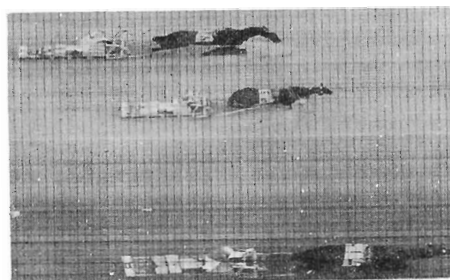
このレースの本命対抗は予想屋さん二社が八、五、一社が七、八としていた。

スタートは金馬一斉、ヤマト一寸おくれ気味、第一障害先頭群コマ、トーオクワカでこえ、ガロン、バイとつづき、ヤマト懸命に追うも脚速湧えず、チカルは登坂に苦しみ最後尾となる。

第二砂障害はワカ、トーオク歩度を伸ばして逃げ、バイ、コマ、ガロンとつづき、ヤマト登坂時左側によじれ方向を修正、チカルも又左右によじれて左胸引をまたぎ下そり補正大きくおくれる。

第三障害には先頭トーオク、ワカと到着、一寸はなれてガロン、コマ、バイ、マヤトの順でたどりつく、チカルも追いつき金馬一線で息を入れる。

トーオク、ワカ先づこえ、バイ、コマガロンとつづく、本命ヤマトは一瞬ワラビ型罫に手綱引つかかり急ぎ下そり補正先行馬に三〇米おかれて六位でこえる、チカルは他馬がゴールインしてから漸やくこえた。ゴールまでの平坦コースは先



手前から3着ワカテンリュウ、2着コマヒカリ、3着バイラク

頭トーオク、二番手ワカで、懸命に逃げるをバイ、コマ必死に追い四頭の接戦となる。ゴール前十米でワカ力つきて歩度にぶり一瞬停止、トーオク一着でゴールイン、タイム二分五九秒九、二位にコマ、ワカ並んで同時にゴールイン、写真判定でトーオクのそり後端わずかに出て二着となる。ワカ三着、二、三着は三分十三秒四の同タイム、四着のバイラクも一砂

三の僅差でゴールインした。この三頭の接戦ぶりを物語るタイムである。

ここにその時の三頭の着順判定写真を掲げる。①のワカテンリュウは敢斗又敢斗ハナ先は二着に入っているが脚速鈍りのび切つてほんの微差で三着になっている、最後まで敢斗した騎手のポーズもよく出ている。

9 紛争おきる

予想屋さん三社の本命馬ヤマトは予想に反して六着となつた。

しかしフタをあけてみると単も複もコマヒカリが断然トップ。連勝も5→8(コマとヤマト)二四、〇九八、次はス→5(トーオクとコマ)の一一、四三〇で「コマからみ」は倍以上の(人気)があつたのだから、どうやらお客さんの本命はコマヒカリだったらしい。

ファン二五〇→三〇〇名はヤマトの八百長だと主張して抗議し紛争となつた。

◎この八百長を審判は見逃している。

◎あたり馬券を三十万円買った者がいるのを知つてるか。

◎うまやと結託してもうけた奴がいるのを知つてるか

◎八百長で損害した馬券は払戻せ

◎騎手を永久騎乗停止にしろ

このような紛争のときいつも聞く、きまり文句である。八百長ときめこんでいるファンにしてみれば当然の抗議といえよう。

10 審判委員はどうみたか

騎手Kの追い方は平素「上下反動型」「踊り型」「リズム型」ともいわれる独特な馱法動作で上下に激しく動き、時には飛躍し上体を前後左右に動かしてべん打する一見派手なポーズで、この競走においてもそれは充分に発揮しており、故意に馬の能力をセーブする動作は終始みられず、審判団は一致して「馱法上、不正と認めるものはない」と断定した。

11 馬に変化はなかつたか

この七頭が前回出走したのはいづれも旭川でその時の成績とこのレースとを比較してみるとこの表のとおりである。

◎馬場はいづれも晴重であるから状態は同じとみる。

◎前回と比較して積載重量の増減はどの影響したか

◎二〇kg減の馬は

一着トーオクオー 一分〇八秒三短縮

四着バイラク 三一秒二〇

七着ノーチカル 三六秒一〇

(下そりタイム一〇秒加算)

◎一〇kg減の馬は

五着ガロン 一二秒九短縮

六着ヤマトオーザ 一二秒六〇

(下そりタイム三秒加算)

◎増減のなかつた馬はどうだったか

三着ワカテンリュウ 四秒〇短縮

今回と前回出走時の負担重量とタイム比較

今回の成績 (場日8月15日)				前回の成績 (場日7月22, 28, 29日)				場況	備考			
鞍馬	馬名	負担重量	タイム	レース	鞍馬	負担重量	タイム					
1	2	トーイワイ	490kg	2:59.9	5	10	7	510kg	4:08.2	20%減	1:08.3短縮	馬場状況 悪化 晴重 場日 -
2	5	コマヒカリ	490	3:13.4	2	-	1	460	3:03.2	30%増	10.2増	
3	1	ワカテンリュウ	480	3:13.4	4	-	1	480	3:17.4	0	4.0短縮	
4	7	バイラク	490	3:14.7	5	-	4	510	3:45.9	20%減	31.2-	
5	3	ガロン	490	3:30.0	4	-	5	500	3:42.9	10-	12.9-	
6	8	ヤマトオーザ	500	3:33.2	5	-	2	510	3:42.8	10-	9.6-	
7	4	ノーチカル	500	4:54.7	5	-	9	520	5:20.8	20-	26.1-	

◎三〇kg増の馬は

二着コマヒカリ 一〇秒二増加

これで見るとヤマトにおかしなところはどこにもない。予想に反して他馬と離れたため脚速が冴えなく見えたただけのことではなかつたか。

むしろ前回と比較して一着のトーオーが早やすぎた観がある。

12 大口馬券氏はわかつた

このような騒ぎのとき、いつもファンからいわれることは、一部の者が厩舎と結託して大口に馬券を買いこみ不当の利益を得たということである。

そのため平素から投票委員は三万円以上の馬券買いがあつたときは直ちにこれを委員長に報告することになっている。三万円では大口ともいえないが、とも角どうした注意をすることになっている。

その日はお盆の休日で両替金の不足という予測しない手違いがあり窓口が混雑していたため投票所は多忙を極め大口買いの報告がなかつた。しかし珍らしいことが起きた。

騒ぎのときにはいつも出る大口買いの抗議だがいまだにその事実をつきとめたことはなかつた。私の紛争処理経験は既に九〇件を越すが、いまだにこの噂や疑問をつきとめたことはない。しかし今度の紛争では見事にこれを成しとげたのである。

夕刻の執務委員会で場内取締係員K君(本会職員)から、その大口馬券買いファンはよく知っている。春先からばんえい競馬について廻り、十万円二十万円と大口に馬券を買っている人で名前は判らない、今日はこのレースで十万円づつ二回と八万円一回とに分けて買い、計二十八万円を同じ窓口で同じ時に買っていた、という報告があつた。

更に又払戻係のH君(本会職員)からその人は当日十レースの的中馬券も四十万円買い最終レースが終わってから、九レースの分と合せて三三三万円を受け取って帰った。この人はいつも最終レースが終わってから、かためて払戻金を取りに来る人で名前は知らないという報告もあつた。

私はこのとき暗たんたる気持ちでフト明るくなつたような気がした。その人はこの紛争レースに限って厩舎と結託して買ったものではないという自信が湧いたからだ。

13 大口馬券氏を追え

K君H君はS投票委員、K総務委員、場内取締委員、警察官に大口買いファンをおぼえさせること厩舎出入を厳重監視すること、来場したら私に逢わせることを申合せた。

第二回目初日は遂に来場なく、二日目の八月二十日第四レースで三十万円の大口買いがあつたと投票委員から報告があつた。これは不的中であつた。それから間もなく私はその人と逢うことができた。それはH氏という方で会谈十数分、なにも疑うものはなかつた。

その日からS投票委員はH氏の馬券買いぶりを、そのたび毎に報告してきた。私は報告を受けて、その馬券と厩舎との関係調べ、全審判委員に連絡してレース監視を手配する役割であつた。

二日目から最終日までの五日間にS委員から報告のあつた購入馬券は、多いときで五十五万円、少ないときで三万円、十万円から十五万円位の買ひ方が多かつた。計十六レースで連勝馬券三十三組、的中五組不的中二十八組であつた。

八月三十一日帯広警察署はこの事件を白と断定し捜査を打切る旨連絡があつた。

14 その他の情報について

このレースについては次のような話もあつた。

◎ ヤマトをおさえて同厩舎のトーオクをやり二位コマとして馬券をはつた。

◎ ワカが勝ちそうになつたのでゴール前であつてトーオク、コマと勝たせた。

というのだがとてもこれは信用できない、あれだけの接戦できわどい勝負をしていることからみて、そのような乗戦が組まれたとは全く考えられない。

◎ 朝の調教でヤマトは五本か六本(五〇〇kg~六〇〇kg)積んで無茶苦茶に攻馬をやり、馬を疲れさせてしまつた。

というのもあつた。あのクラスになると重量競走にそなえて、その呈度を積んで調教する例はいつも見かけることである。或は無茶苦茶とみた人もあるかもしれないが、そうだと断定はなかなかつかない、疲労度は軽中過に大別されて、その兆候を分類しているが、中等度(歩様つまづき不確定)でさえも二・三時間で常態に復するといわれ、過度ならば元氣消沈食欲衰え病的な異常を現わす筈である。

疲労とはたとえ短時間でも重い物を運ぶほうが、軽い物を長時間運ぶよりも、体力を消耗することは誰でも知っていることである。

だいぶ前のことだが盛夏炎天つづきのカンカン馬場で一、一〇〇Kの特別競走をやつたことがある。これなどはその論

法からすれば減茶苦茶な競走で、あとのほうの馬は第三障害で立往生してしまい、騎手は責めたて、馬も懸命だったが、なかなか登れなかつた。

それでも競走が終つて数時間後には、スツカリ疲労を快復して馬はケロリとしていたのである。

その上前記したように他馬に比較して能力が変動したとは認められないし、朝調教はおそくとも七時には終つていたであろうからレース時刻の午后四時までに九時間以上の間隔があり、少々強い調教でも疲労は快復している筈である。

馬を常に完調な状態にしておくことは調教師の腕だが、生物の体調は微妙なものであり機械のように正確でないから何とも言えないが、そのような噂を確認として断ずることは当然審判委員としてはすべきことでない。

我々は騎手を擁護しているワケでもなく、その必要もない。どの角度から検討しても不正と断ずるものがなければ白とするのが当然である。

ここでまた前号にのせたことを再録したい。

15 疑わしきは罰せず

よく「競馬は疑わしきは罰する」ということをきくが、これは恐らくほとんど実証が揃つていて疑問の余地がない場合のことをいうのだと思う。

私は事務監査において監査委員から前人気と馬券の売れ方がまるきり違うから

これは不正競走であると指適されて、長時間突込まれたことが何度あつた。これは専門家でも怪しいと思うほどで「疑わしきは」の最たるものと思う。しかし馬券の売れかたはどきまでも傍証であつて、それをもって不正と判定することはしていない。

あくまでも「疑わしきは罰せず」というのが信念であり「罰なき者を罰するほど大きな罪はない」それは不正を発見しえなかつた見落しや技術未熟の恥よりも更に大きな恥である。

最近刑事事件で有罪から無罪になつた例がいくつあつた。私は仁保事件の岡部さんが十七年間無実を叫びつづけて、死刑から無罪になつたことに思いをいたすのである。無罪に喜ぶ岡部さんの笑顔には十七年の苦悩の皺は消えていない。

16 眞実はただひとつ

紛争が起きる。ファンの皆さんは「八百長」と思いこんでいる。「審判のメクラ野郎」と怒りはエキサイトする。「てめえ等が判らなければ騎手を出せ、俺等が泥を吐かせてやる」憤慨してるから言葉も乱暴になる。

大切なお客さんだけれど、それではまるで人民裁判だ。是も非もなくつてしまふ。我々は静かに。

「競馬では審判委員が審判し、ご主張のような処分は執務委員会が充分審議の上決定することになっております」とお答えするしかない。

「亜寒帯」の批判には「しかし八百長というやつ騒がなければ素通りしそうなところに問題がある」とある。

いくら騒がれても不正とするものが無ければ処分はいたしかねる。騒がれなくとも不正と判断すれば処分はなされている。昨年全能力関係で処分を受けた者は三名あった、いづれも紛争にはなっていない。

ただ競馬には時に裏面から不正が摘発された事件があるので、この批判がなされた理由はわからぬではない。

あくまでも審判団は冷静に事を判断し不動の信念をもって、あらゆる非難に耐え、毅然として任務を遂行し、いやくも外圧によって動揺することのないよう頑張らねばならぬのである。

17 ばんえいはらくなスポーツ

「亜寒帯」の批判は最後にもう一つ動物虐待という意味でもこんなレースは廃止すべきだろう」と結んでいる。

このことについても本会報前々号にのせた文を再録してご理解を得たい。

前巻「少なくとも平地競走に比較してこの競走は楽である」ということはいえる。それは平地競走の外傷事故死がばんえい競走に比較して問題にならないほど多いことでもわかる。

平地競走は秒速十八秒位の猛烈なスピードで地面を蹴って空間を飛行し、地面に激突するものであるから、その筋腱骨蹄にかかる負担は大変なものなのである。

昭和四十三年から同四十五年まで三年間の死亡及び重傷馬について比較してみると次のようになる。

● 道営競馬(平地)

外傷による死亡 三三頭

重傷 一二六頭

病死 一一頭

重病 三頭

計 一七三頭

なお前年の四十二年は最多発年で死亡

● 市営競馬(ばんえい)

外傷による死亡 四頭

重傷 一頭

病死 五頭

重病 二頭

計 一二頭

外傷による死亡数の中には競走中心臓麻痺で死亡したものを含んでいる。ばんえいの死亡馬は全部そのような内臓疾患である。



以前にも動物愛護協会からばんえい競走は苛酷であるという抗議を受けたことがあるが、一般スポーツ、平地競馬に比較して決して苛酷な競走ではない。これをやめろということは今もなお盛んに行なわれている農村の楽しき素朴なお祭りばん馬をも取上げることになるので切にご理解をいただきたいと思う」

このへんの事情は素人ながら作家の佐藤愛子さんがよくとらえて、こう書いておられる。

「まさにここに人生がある、コン畜生と思う馬は頂きを踏みこえる、もうあかんとすぐに思うような根性なき馬は立往生して途方に暮れた顔、他の全部の馬が引揚げてしまったのをみて、ゴロリと横ざまに転がってふてくされていく。馬の中にも今どきの若者みたいな馬がいるのである。まったく馬の人生はきびしい。人間の世界にはもうこのような鞭うつ人がいなくなつた」

18 それではお前は神様か

とんでもない。永い歴史を持つ平地競馬には多数のベテランがいる。にも係らず毎年毎年機会ある毎に、研修会をひらいたりして研究を重ねている。問題は絶えることなしに起きてくるのだ。誠に競馬こそは「日々新たり」である。

ばんえい競走の歴史は浅い。我々は亜寒帯の批判こそ貴重な警語として、謙虚に受け、技術を錬磨する刺戟剤としていくべきだろう。紛争がおきる、真実を知つ

ているのはただ一人かもしれない。人の心を見抜くほどの技術が必要だとしたら神様こそ完璧なのであろう。我々は人の心を見抜くことはできない。眼前に展開する事象を読みとる伎倆をいかに神様に近づけるかだけである。

二 馬産とばんえい競走

19 ばんえい初期のころ

もともとばんえい競走は産業用馬の振興を目的として法制化されたものだが、発足以来の経過をみると、その初期はこの競馬に出て楽しむという農村のレクリエーションの催しの観があった。それは騎手であり馬丁である馬主が、お祭りばん馬競走の延長として、賞金を稼ぐよりも優勝旗の獲得を目指して出てきたものである。つまりみんなが本職のある連中で、競馬で喰おうなどとは思っていないから、ばんえい競走分の収支では赤字の者も多かったようだ。

初期のころは食糧増産、農地拡張の時代であったから、馬は農耕輸送上極めて重要であり、本道には三〇万頭近い馬が飼われていたが、そうした時代には競馬に出てくるものは少なく、近村の農耕馬を狩り集めて競馬をやるころもあった。ばんえい競走を楽しむためには、家業を休み金も使わなければならなかったのだから、あまり集まらなかったのも無理はない。

戦後競馬が発足した頃は平地でも馬不足に悩んでいたから、競馬の馬不足は珍しい事ではなかったが、ばんえい競走の場合は事情が違っていた。馬はたくさんいたのである。

ところが昭和三十八年頃から減少の歩度をはやめた馬は、すべての動力源が機械化されるに従って、まるで急坂を落下するなだれのように激しい減少をしめしだした、十年前二三万頭もいた馬を六万頭（軽種も含め）にへらしてしまった。

20 ばんえい馬はふえる

逆にばんえい競馬は年々増加しつつげ遂にことしは七〇〇頭余の馬があり、入厩馬房の制限、調教師割当制をやるころまでできてしまった。

それは一回三、四日間一年十四回五十二日間（三五年）位をやっていた時代から、一回六日間一年十一回六六日間満度開催の時代を経て、現在の競馬場移転新設拡張時代に入り年間十四回（将来各市四回を要望）八十四日間の開催時代を迎え、報償費も三年前の二倍以上に増加したこともよるのであろう。

つまり馬がたくさんいた頃は寡少に苦しみ、激減していく現在は溢れるばかりの増加で苦しむという逆現象を生じた。

これは当初の頃は、馬は仕事に忙しかばんえい競走の収入なぞあてにできなかった。今は稼ぎ場所が少なくなつてばんえい競走の収入が、本職収入の上積みと

して充分見込こめることになったからだとみてよからう。

従ってばんえい競走の経営は、その時代に応じて変化していくのは当然である。

農林省事務局は三年前ばんえい競馬開催回数増加の検討にあたり、競馬場新設経費の捻出を目的とする回数増は臨時的な性格があるため、増加承認は結局ばんえい競走の振展策となる。即ち産業用馬の涵養をはかることを目的とするばんえい競走でなければならぬとし、そのことを指導激励するところがあつた。

21 ばんえい競走馬資源対策の樹立

時代は産業用馬の維持振興に何等かの手を打たなければならぬ線にきていた。

農林省当局のアドバイスを契機としてばんえい競走主催者は一昨年来生産団体

とも協議を重ね、馬産に密着する競走を実施して、ばんえい競走馬資源の確保をはかる。方、一般産業用馬の維持振興にも寄りするよう計画し、馬資源確保対策をたて、これを実行することによつてこの競馬本来の目的を達成すること、したのである。

先づその第一、着手から順次説明してみよう。

第一年度（昭和四十七年）

(1) 新馬の年令を明八才以下とする。

これは年令制限を強化して馬の消流と補充との回転を早め、産馬の需要を旺盛にしようとするのが目的、あわせて繁殖用馬の出走防止、年令鑑定を容易にして馬登録の公正をはかるのがねらいである。

(2) 四才馬競走を新設して若令馬を保護していく

従来三才馬は幼年級として一般馬と切りはなしてレースをやってきたが、ばんえいでは四才も能力的には低いとされ、五〇K減の優遇措置はあつたが、休場するものが多かった。これでは馬を持ちこたえられないので、少年級としてレースを特設し、生産助長策の効果をあげようとしたものである。

(3) 農ばん馬、血統証明制度の確立を要望しその実現をはかる。

● 良血、良型、優秀能力の馬を残すためには、適正な血統証明書が必要である。

● 将来補助事業を推進するときは馬籍のなくつた今日、事務的にも血統証明書だけがたよりである。

● 馬登録証は適正な血統証明書によつてのみ交付されるものと思う。

● 現在の血統証明制度ではもうすぐ混乱時代がやってくる。全国を一元化した制度の実現を切望するものである。

第二年度（昭和四十八年）

(1) 新馬の年令を明七才以下とする。

(2) なお、昭和四十九年以降新馬六才以下に、古馬については昭和五十年以降明十才以下に制限することを予告する。

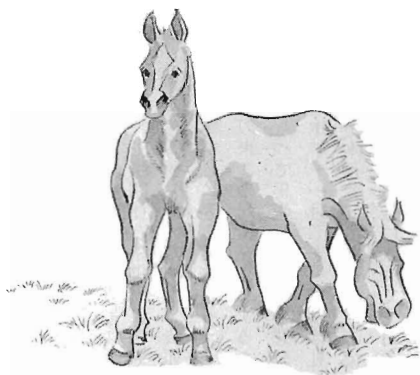
これは前述の理由のほかに、最も能力の充実する時代に出走させる一方、引退した後も、繁殖用、使役用として充分働ける能力を残しておくこと、且つ又飛びきり強い馬が毎年賞金を一人占めにしないようその交代をはかるためである。

(3) 祭典ばん馬競走の保存奨励

産業用馬が激減していく中で、本道の素材な行事である祭典ばん馬競走は全道八十ヶ所以上で盛んに行われている。これが衰微していくことは北海道の古典と縁が、馬と共に失われていくような気がする。お祭りばん馬の実態を把握していくことは、馬資源の動向を知ることであることしからその主催者と連絡を密にして副賞を贈るなど、この野趣にみちた北国の風物を保存奨励する。

(4) 補助事業の構想立案公表周知

これは昨年の定期総会と助役会議にお



いて決議された資源対策の中心をなすものである。

もし我々の念願する産業用馬の血統証明制度が確立され、その方向が決定すれば、直ちに公表できるように、今から構想を練り、その成案をまとめて生産者、需要者側及び一般に周知し、生産意欲の向上をはかるよう準備しておく必要がある。今もなお刻々と馬は減少しつつある。なるべく速やかにこの対策の趣旨を公表してその反響を把握したい。

第三年目（昭和四十九年）

- (1) 新馬は当年以降六才以下に制限
- (2) もじ新規血統証明制度が発足すれば将来ばんえい競走に出そうとする馬は産駒検査を受け、血統証明書を貰っておかねばならない。

第四年目（昭和五十年）

- (1) 古馬は当年以降十才以下に制限
- (2) 新規血統証明制度をもっている馬は当才二才となる。

第五年目（昭和五十一年）

- (1) 新規証明書のある馬は当才、二才三才となる。
- (2) 三才馬を対象として補助事業は活動を開始する。

第六年目（昭和五十二年）

- (1) 新規血統証明書のある馬は四才に達する。

(2) 新規血統証明書のない馬は当年以降出走を拒否する。

◎ その他

馬産指導者、生産団体と主催者との懇談会、馬資源、馬利用状況の調査、会報の発行による馬事PR等を実施する。

既に一昨年以来この対策を立案するために数回にわたって馬産指導者との懇談会をひらき、昨年十一月二十一日には札幌で道、生産団体五者、主催四市、市協の懇談会を開催、ことしに入って三月七日中央において農村者、全国協会、道、全公営、馬事協会、四市の懇談会を開催した。

馬利用の調査としては別場の記事にあるとおり座談会、対話などが初められている。このように調査方法はばんえい競走施行者らしい方法で行いたいとい



岩見沢市稔町客土馬は3才イチフジ

る。本年中に馬主騎手のうちから各地区毎に委員をきめて、馬の生産、利用、取引、需要状況を調査する調査網つくりを構想中である。

三 競走のやりかたを変える

22 馬の分けかた

ばんえい競走は明治の中期頃から行われてきた村落のお祭りばん馬から生れたもので、競走方法はお祭りばん馬がお手本であった。

今全国の地方競馬では出走馬を能力別にABC Dと区分してやっているが、中央競馬には条件レースはあるけれども、人為的に能力を強区分するというやり方はやっていない。地方ではあまり馬を離れないように走らせる方針でこんなことになったのだと思う。

お祭りばん馬も元来能力別でやる習慣だったらしく、その方法として体型区分が採用されていた。

23 体型による区分

この方法は昭和二十四年から三十八年まで十五年間続いた、馬体検査員の合議によって甲乙丙丁の区分をきめる、この方法だと体重が増減があっても、体型には変化がないのでその点に長所はあるが、人間のやる仕事は結局見ただけでうまく能力を区分するなどということとは不可能であるし、特に上下級の接点に問題が起き不満が多いため廃止した。

24 体重による区分

多くの文献によれば体重の大小は、ばんえい力の大小に概ね比例するとあり、又一般に馬のばんえい力は体重と同量をけん引しうる、瞬間ばん力は体重の三倍ともいわれ、いずれも体重を基礎としていることから体重制を採用することにした。

この改正によって人間がやる不正確は是正され不満も解消したが、力とスピードの競走であるため、必ずしも体重の軽重が能力の優劣に比例するものではなく、厩舎側は制限重量から一キロでも体重がふえれば昇格するので、それをおそれ、特に上下級の接点に近い体重の場合は、その調整に浮身をやつす始末で、そのためいろいろ問題も出てきた。

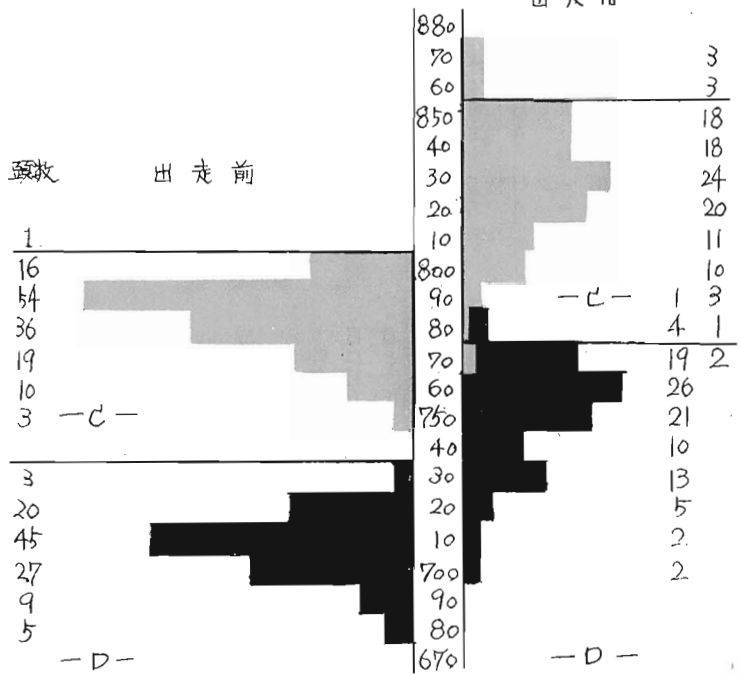
25 体重制の矛盾

昨年第一回の帯広馬体検査で計量した五才以上三三〇頭の体重は図に示すとおりでおかしな階段状になっている。

D級についていえば、七三〇K以下がDであるから、七二〇Kから下の方に馬の頭数がダンゴのようにかたまるのである。一回出走してからは体重がふえても五〇Kまでは元級にすえ置かれる「きめ」であるから、七八〇KまでふえてもDというワケで、七七〇Kから下の方にダンゴになっている。

これをもっても厩舎側の苦心のほどがよくわかる。

47 出走前と出走後(50kg増)の体重調査



馬をどんぐり肥らせることは能力上あまり感心したことはない。競走の朝の飼付けなどは少くなく目にしたほうが良いので体重調整も悪いことではない。殊に体重が五Kか十Kにふえたところで、馬が強くなるワケではないから、体重制はその点不合理がある。五K十K位ならまあ、だが、もっと大きな減量になると公正上うまくない。四四年の計量では十日間のうちに一一〇Kもふえた例があった。

26 どうしたらよいか
 競走の成績によって区分する方法しか考えられない。全馬を一緒に走らせて強い馬は上級に、弱い馬は下級にするという方法である。私は前々号の会報にこう書いた、「体重の重い馬は強いが、体重

27 上と下の能力をくらべてみる

の重いもの必ずしも成績優秀とはならない、かといって体重の重いということがなんの価値もないということにもならない。しかしその価値性は個体能力に比較して低い」と。
 大格即能力大、小格小とする体型による区分法や、重即能力大、軽即小とする体重制の論理をくつがえしてしまおう改革なので、検討も慎重に始めた。六月七月の二ヶ月で大体检討は終わった。
 四十六年については各地最終回分、四十七年については八月十五日帯広第一回までの成績表の中から、同じ日に行われたレースで、上級馬より下級馬のほうが良い成績を出したものを、引き出して対照してみた。それを見ると馬の能力はあまり違わないことが判った。予想のとおりである。つまりそれは下級の中以上の馬は、上級の中以下の馬より強いと同じ位ということになる。

4 6年1着タイム比較

第2回帯広	第1日目	レース	C	4	2	0	K	1	4	7	5
1	8	D選	4	4	0	0	1	4	3	0	0
2	7	C	4	5	0	0	1	3	2	9	6
3	8	B	4	5	0	0	1	4	3	3	3
3	7	C	4	8	0	0	2	0	5	2	5
6	8	B	4	5	0	0	2	0	9	8	0
6	3	C	3	9	0	0	2	0	0	9	5
7	7	D特	4	0	0	0	1	5	8	0	0

第3回北見

1日目	8レース	B	4	5	0	K	2	3	3	0
1	7	C	4	5	0	0	2	0	5	8
2	6	C	3	9	0	0	2	0	5	4
2	5	D	2	3	9	0	1	5	8	4
5	6	B	2	4	6	0	2	5	7	1
5	8	C特	4	6	0	0	2	3	6	3
5	10	A勝	5	1	0	0	3	1	5	3
5	2	B	5	1	0	0	2	2	5	1

第3回旭川

1日目	5レース	B	4	5	0	K	2	1	7	4
1	7	D特	4	8	0	0	2	1	5	1
1	8	C特	5	4	0	0	2	1	1	3
4	9	A	6	0	0	0	3	2	0	4
4	10	C特	6	1	0	0	3	0	5	2
4	3	B	4	3	0	0	2	0	1	9
4	7	D特	5	0	0	0	2	0	0	1

第4回岩見沢

3日目	7レース	B	4	5	0	K	2	3	6	2
1	10	C特	4	6	0	0	2	2	1	1
4	5	B	4	5	0	0	2	4	6	4
4	8	C特	4	5	0	0	2	2	9	6

47年1着タイム比較

第1回	岩見沢	3	特	4	6	0	3	: 0	3	.	2
第3日	目6	レ	ス	C	3	9	0	K	2	: 0	9
	"	"	"	D	特	4	3	0	2	: 0	8
第2回	帯広	4	特	4	2	0	K	3	: 0	0	.
第3日	目7	レ	ス	C	4	2	0	K	3	: 0	0
	"	"	"	D	特	4	5	0	2	: 5	8
5	"	"	"	B	5	2	0	K	3	: 0	6
	"	"	"	A	5	0	0	3	: 1	2	.
第1回	北見	5	特	5	4	0	K	2	: 5	4	.
第5日	目0	レ	ス	B	5	4	0	K	2	: 5	4
	"	"	"	A	5	4	0	3	: 2	5	.

第1回	旭川	4	5	0	K	3	: 2	1	.	5
第1日	目9	レ	ス	B	4	5	0	K	3	: 2
	"	"	"	C	4	5	0	2	: 4	9
2	"	"	"	B	4	5	0	K	2	: 1
	"	"	"	C	4	5	0	1	: 5	7
3	"	"	"	B	特	5	4	0	K	2
	"	"	"	A	5	4	0	2	: 2	7
5	"	"	"	A	5	4	0	K	3	: 3
	"	"	"	B	5	4	0	2	: 5	3
	"	"	"	C	特	5	2	0	3	: 3
第2回	旭川	4	5	0	K	3	: 4	9	.	3
第2日	目8	レ	ス	B	4	5	0	K	3	: 4

この表は上級馬より下級馬のほうが強い例であるが、なお二年間全部を調査すればまだ多くの例が出てこよう。

そこで番組編成委員に依頼して第二回旭川でA B混合三〇〇キロレースをやった。こんな軽い重量で走ったことないからブツ飛んでくるだろうという人もいたが、あにはからんやである。晴重で一分五三秒一、この回のD級では六日目晴重でキリンジが一分五三秒二で、その他は二分五、六秒か、ついている。

第一回目D級三〇〇キロは十八レース行われたが、重馬場一分五〇秒台五レース、軽馬場一分四〇秒台三レース、二分以上十レースという成績、これから考えると重量を軽くしていくとA BもDもそう変らないということが判る。重くしていったらどうなるか、それは体重制を徹底したらどうなったか、の問題と共にこの研究課題である。

昨年は六月に入ってから、毎回開催前日に行われる騎手講習会で、体重制の矛盾と改正の必要を説いてきた、調教師諸君も共に研究するよう呼びかけたが、結局競馬終末の頃には我々の考えに同調した形となった。

28 競走方法の改正方向きまる

翌年改正の方針は決まった。最後の仕上げとして九月岩見沢と北見でA B C D混合三〇〇キロレース(オールカマー)をやった。これは計画も遅かったので平場競走としてやったが、ばんえい競走と

しては甲乙丙丁一緒に走らすような前代未聞の企画なので、勿体ないような興味あるレースとなり、人気を呼んで馬券も大いに売れた。

全部で四レースをやったが、その結果は出走馬A八、B一〇、C八、D一二、計三八頭で、五着以内に入ったものは、A六、B四、C五、D五、着外はA二、B六、C三、D七となり、一着はA二、C二でA Cが互角の成績、ドンジリ最後尾はB二A一C一で、Dは頭にも尻にも来なかったという珍成績、偶然だろうが面白いものである。

着差は先頭から最後尾まで、二〇秒一二秒、二七秒、四〇秒と、ばんえいとしては概ね接戦を演じている。



1 流感接種状況がTVに

昨年三月二十四日旭川では、家畜流通センターに三百余頭のばんえい競走馬を集めてインフルエンザ予防接種を行なったが、これがH B Cローカル放送にのり全道の茶の間に送られた。

2 NHK「ひるのいこい」に

昭和三十九年体重による格付区分に改正してから九年目、昭和四十七年をもってこの格付方法は終止符をうった。ことしから別場のように取得賞金額による区分によって出走馬の格付をきめる、本年は永年のしきたりを打破する最初のことであるから、体重制を加味してやることにした。今まで調教師諸君は体重を軽くしようとして苦心したが、ことしからは充分に栄養を興えて、心おきなく体調を整えることができる。

むしろ上級に格付を希望する馬は体重をふやして調教を充分にし、筋腱骨肉肉藏を強健にし充実しなければ、行けないことになった。

七月十四日馬事指導者村山豊氏や、岩見沢市の西田氏、そのほか馬産家五、六人が和室に集まっての、「農ばん馬」を語る座談会形式の「馬の今昔」

3 H B C「歌うプレゼントショー」

八月二十七日苫小牧町の樽前ランドに繰りひろげられた有名歌手出演に賑わう歌謡曲ショー、岩見沢市小倉畜産課長と

白瀬元騎手が出演、競馬開催中なので現役騎手は出られず、元騎手の白瀬君が騎手服に身をかため、ばん馬ならぬ人造馬



を引いて現れる。小倉さんは平地競走馬の蹄鉄と、その二倍もあるばん馬の鉄を出してみせ、聴衆はビックリ。

4 岩見沢ばんえいは11PMに

昨年全国に放映された深夜の人気番組11PMに再度取上げられ、九月四日全国放送番組に登場。昨年は「ゼツリン馬は行く」という題で、「子供を誘って見せるところ、シンザンの勇壮な場面がでてきて弱った」との苦笑があちこちから寄せられたが、ことしのは「中央競馬くそ喰らえ、花のばんえい競走」と題がついており、中央競馬会に対決させたところに、作者のユーモアがあったのだが、中には「同じ競馬をやっている者がこうムキ出しに書きちやア」と眉をひそめる人もあった。しかし

今度の11PMは一時間番組の中に、ばん曳競走を正しく、面白く仔細に紹介しており、この録画は岩見沢市でも記念にとっておきたいという、ばんえい競走の

PR用資料としても好適といえる。

11PM杯レースも昨年と合わせ二回目になったが、優勝は四才のシレットコ号、片平騎手が獲得した。あご髭の片平騎手は賞杯を、ゲストの真理アンヌさんから手渡されて、そのあと右頬に祝福のキスを受けて万場の喝采を浴びた。現地の出演者は司会の藤本氏とアンヌさん、市からは小倉課長、中川係長が出演、夜のスタジオでは、月亭可朝、木崎国嘉、佐藤愛子、虫明亜呂無、石川喬司、松任谷国子の各氏、地元の札幌からは染谷五郎、大川政美という多彩の顔ぶれ。

佐藤愛子氏、虫明亜呂無氏は昨年引きつきき再度の出演で、まるでばんえい競走のゲストメンバーのよう。このSTVスタジオからの放送には日の出予想屋の渡辺君が出演し、平素の腕前を披露し

た。

5 九月二十三日「秋分の日」

岩見沢ばんえい競走を背景に北海道の自然と馬の消長を語るNHKラジオ放送があった。

6 滝の上ばん馬競走はNHK、TVに

滝の上町のばん馬競走が十月二日のテレビにのった。先づ北見の競馬が囃面に出て、現代の公営ばんえい競走が紹介される。

滝の上町ほどだ馬で有名な福島県相馬村からの移住民が入殖しているところ、相馬妙見神社がある位。

十五年の歴史をもつばん馬競走は秋祭り之余興として奉納されるものだが、このようにに豊作のときは豊作祝いでもある。ばん馬競走の招待状の発送、寄附集めなど素朴な開催事務局の人達、大会が間近に迫ると、河原で砂利をつめた箱を積んで、猛烈なトレーニングが始まる。その当日、九月二十四日はどしどし降りの雨だった。遠く土別、名寄、遠軽から馬がやってくる。

しぶきを上げて先きを争う勇壮なレースが始まる。頬かむりの人、てん倒する馬、寝ころがる馬、応援団、拍手かん声がわく、雨の中である。

優勝レースが終って覇者は優勝旗を肩に場内を一周する。得意絶頂の瞬間だ。拍手が又おこる。

7 高倉健主演映画にばんえい競走馬

七月の旭川ばんえい競走開催期間中、高倉健主演映画「新編走番外地、血ふぶきタンブ仁義」の撮影隊がやってきた。高倉健が買った馬券の馬(騎手本村卓司君)が障害でなか／＼登坂できず、耐まりかねた健さんが飛び出して引っ張り上げるといふ珍妙なルール違反など、この世の中では通らぬ無法さが、架空のやぐさ映画の面白きなのであろう。



高倉健、南利明、田中邦衛と一諸に出演した旅舎の人達



映画撮影隊の人達

人気者の米場で厩舎の連中や、女子従業員など多数が集まって、俄かエキストラをやりに、中休日の一日を楽しくすごした。

8 NHK朝番組に「馬力健在」

ことし三月二十四日NHKテレビ「北海道の窓」に、造材山に働らく人と馬を描いたレポートが放映された。題して「馬力健在」

ルベンベ町から六キロの山で、造材に働らく馬と馬夫の話。麓の飯場から朝早く十人の馬夫が馬に乗って森林の中を登って行く。皆この道二十年のベテラン達で、夏は農作にはげむ農家の人達である。飯場には小母さん一人が留守をする、昔は三十人もいたという通勤造材だ。マイクロバスでくるのは木を切るソマ夫達である。造材の仕事にはこのほか、主任の山頭、帳場、土場巻きなどの分担がある。山の造材にはかき伐、皆伐、選伐とあって、木を痛めると罰金(損害補償金)をとられるので、馬が一番良いのだという。馬の仕事は伐採現場からトラック積荷場まで材木を運び出す役目だ。幅一米足らずの小みちを、大木三、四本を連結させてひっぱり一気に駆け下りる。

雪みちの両側は高さ一米五〇位、幅はせいと一米もあろうか、この道で馬が廻れ右をする。正に馬でなければできない芸当だ。その画面はいつまでも印象に残って重軌馬がいじらしく見える。



夜がくる。手入れを入念にして馬服を着せる。このあたりは馬の疲れをいやす唯一の時間である。馬夫になつく馬は鼻をすりよせる。

林の中を明日も馬は行く。馬は今なお欠かせない一馬力なのである。「馬力健在」十五分間

いつ見ても専門家のまとめるレポートは、音楽を背景に、ソツなく美しくロマンに描かれている。うまいもののだといつも感心させられる。

中央、道北、道東から

◎ 中央ではんえい競走研究会開催

全国にただ一つ、北海道でしかやっていないばんえい競走を、中央の指導者や関係者によく理解して貰おうじやないかという発想は本会が発足して二年目頃からあった。

昭和四十六年二月十七日その第一回をH比谷の松本楼で開いた。

その後開催回数も増加し、売上げも躍進的に伸び、全市が競馬場移転新設に向っている中で、ばんえい競走の公正な発展には直接指導層とテーブルを囲んで、理解を深め、その意見を聞く必要があるというので、今回第二回目を開催することになった。

去る三月七日午後二時から東京都第一ホテル会議室において開催、招待者は農林省から鈴木地方競馬班長以下四名、道鈴木係長、全国協会酒井業務部長以下四名、全公営遺藤局長以下三名、日本馬事協会間専務理事以下二名、それに馬事通信の田辺氏、主催者側は会長旭川市の大久保審議員ほか各市係長と本会職員、全部で二十三名が出席した。

本会事務局長から「ばんえい競走の問題点」と「ばんえい競走馬資源確保対策」について説明、各招待者から活発な質問や意見があつて懇談に入り、話題は産業

用馬のことが多く、この企画は全公営の援助と、招待者の協力によって成功裡に終了、午後五時半散会した。

◎ 北見に咲いた真赤な恋

男性選手憧れのまとポニーちゃん



北見全四回二十三日間の競馬に同市加藤氏の愛馬ポニーちゃん(めす才)が、可憐な姿で、連日出走馬を馬場に誘導した。ところが俄然、重軌馬選手諸君に人気沸とうして、装あん所の一室に休むポニーちゃんをみて騒ぎ、立ち止まって動かぬ馬もあり、ポニーちゃんが通ると鼻を鳴らし足をバタつかせ、近づくと鼻というわけで、とも角男性ばん馬諸君の憧れの的となつてしまった。

このため馬場管理委員もとんだハブニングに大弱り、馬場へ入場の際には、先導するポニーちゃんのすぐうしろには、女馬を配して順序不同にするなど、ほ、笑ましい苦労があった。

ポニーちゃんを慕う男性ばん馬のうち三才のアキタコマ君は最も熱烈で、係員は道ならぬ恋を諦めさせるため、一番遠くの最後尾にするなどつれない処置をした。

あとからの話題では、どうも娘馬でも小柄のものが男馬にはもてるんだ。馬からみる美人とは小柄な馬に違いない。イヤ土産馬ではこんな事にならんのだから、外人馬のポニーは美人なんだ、など、こちらの噂話もかなりのものであった。

◎ 帯広氷祭りにばんえい競走馬

一月二十日から二十二日まで三日間、



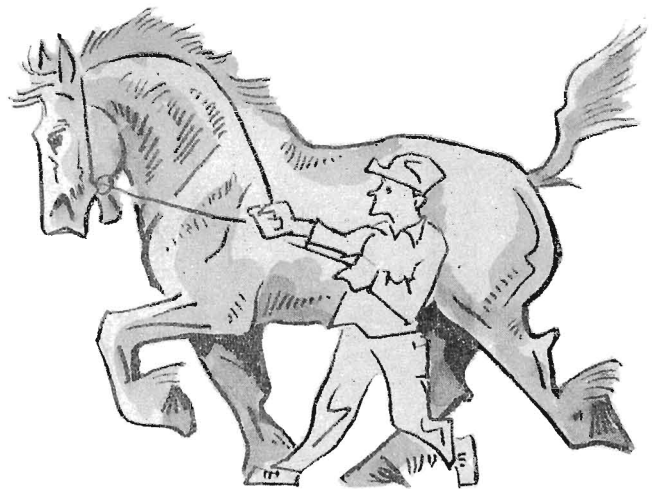
帯広の氷祭りにサービスするばんえい競走馬



帯広市緑ヶ丘公園で行われた氷祭りは、道東冬の祭典として年々盛大となり、連日十数万の観客で賑ったが、市ではこの期間、動物園を臨時に開園して、飾りたてた馬そりで会場から動物園まで、無料サービスで観客を運んだ。

この大役は中西厩舎のばんえい競走馬二頭が引き受けたが、大変な人気をよび、そりを待つお客さんは長蛇の列をなし、一時間も待つて漸やく乗ったという。

かつて馬産王国として全国にその名を馳せた十勝の氷祭りらしい企画、重挽馬の大きさと力と、従順さとその良さ、馬への愛情を見せた素晴らしい風景であった。



馬の嫉妬

村山 豊

代馬を探してやらねばと考え、早速、北大獣医学部のI教授に連絡して一緒に虻田町へ出向いて貰うことにした。

「第一世ゴジエル」は北見の渚滑産だが、当歳の時、青森の鞍馬師に買われ、青森で鞍馬競走に出走していたのを虻田の馬きちがい共が探し出して、八戸からつれてきたベルシユロン系の芦毛馬で当時明五歳だったが高一米六八の大格馬である。管理人の高橋君の話によれば、五月十八日、巡回種付に出かけ、異常なく一頭の牝馬に種付して、帰途花輪部落に立ち寄つたら、丁度発情した牝馬がいたので、これに種付しようとしたところ、射精せず、陰莖を勃起のまま、俗

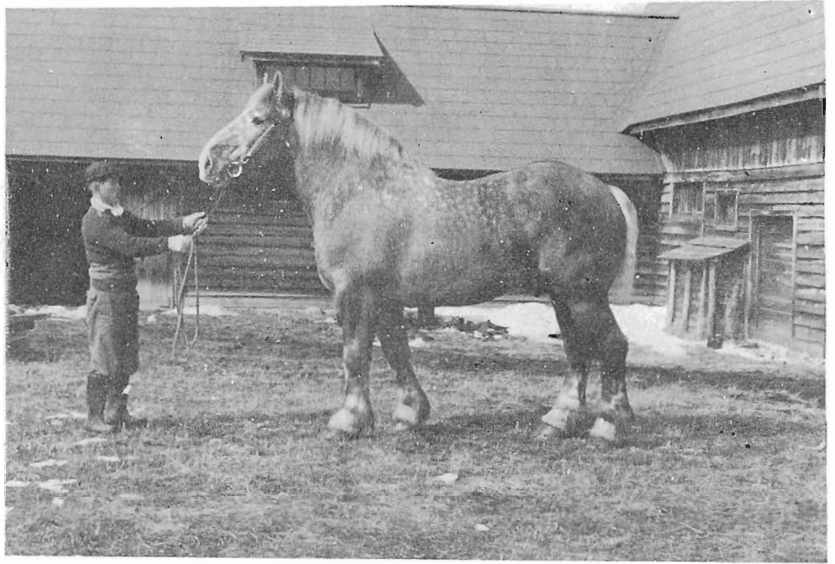
昭和四十五年のことであるが、馬の種付最盛期に入った五月末の或る日、胆振生産連のH技師から電話があつて、虻田町の「第一世ゴジエル」が急に射精しなくなつてしまつたので、代りの馬を世話して欲しいと言つてきた。射精しないと言うのは、一体どうゆうことか電話ではさっぱり要領を得ないで、とにかく馬の様子を見て、どうしても駄目なら急遽

にいうラッパ抜きをやつてしまい、二度、三度と牝馬に乗せて見たが、どうしても射精せず、不成功に終つてしまつたという。それ以来、種付所にひき付けてくる牝馬に数度乗せて見たが、毎回同じように「勃起のまま抜いてしまい、全々射精しないので、最盛期に際し全く困り果て、生産連に代馬の派遣を頼み込んだのだという。何とも妙な話である。早速種付所

に待期させてあつた発情牝馬に寄せて見ることにした。厩を出るなり「第一世ゴジエル」は「抜け刀」で、鼻をならしながら勇み足をふんで大した元氣だ。やゝ氣充分情欲は横溢している。この調子ならい、じあないかと見ていると、牝馬に近づくなり、いきなり乗駕して、盛に腰を使う。調子は上々と思つたところ、もう一突きというところでストップ。高橋君がいそいで掌で裏筋をマツサーするがもう駄目、陰茎を大きくしたまま降りてしまった。無論射精しない。

鎮静させてからと思ひ、十分ばかり附近を騎乗運動させて来て再び乗せて見た。しかし前回と全く同じ調子でもう一息というところまで行くのだが、引金がおろさず、発射できずいゝわゆるラツパ抜きだ。そして直ぐまたかかろうといら立つ。こんなに元氣よいのに射精できないと言うのは一体何が原因なのか全く不思議だ。見ているとこつちの方がいらいらしくる位だから当の「第一世ゴジエル」がいら立つのも無理はない。

さてそこで「第一世ゴジエル」を埒場に入れさせて「教授の診断だ。辜丸を掴んで見たり、会陰部を触診したりしていたが、何等異状は発見されぬらしく教授は頭をひねっている。ついで直腸検査が始まつた。見ているといきなり竿の先からポタ／＼と尿が垂れる。大急ぎでシャーレを持ってこさせてやつと最後の一筆を受け取つた。直腸検査で精管か何かを刺激されたために出たものと思う。



第一世ゴジエルと高橋君

てから三週間位になるとのことだった。

私はふと菜豆桿を食つた馬が腰抜けになつて騒いだ昔のことを思い出した。射精不能の原因はどうやら神經的なのものように考えられるし現に菜豆桿を食わせるようになったから起つたことだから、とにかく今日から菜豆桿の給與を中止して様子を見るようにと申し渡した。

次は代馬の心配だ。私は徳別町に配置していたベルシユロンの「高行」を代馬として供用するように手配してやつた。

前置きがずい分と

長くなつてしまつたが、その後高橋君から聞いた以下の話が本文なのである。

徳別からきた「高行」を「第一世ゴジエル」の隣の馬房に収容し、発情牝馬が幅横していたので翌日から朝、昼、夕と一日三回種付に供用した。ところが

「第一世ゴジエル」の態度が一変した。馬房の中をぐるぐる歩き廻り、全く落つきを失つて、盛んに前がきをやる。立ち

上る。飼槽には眼もくれず、物も食はずに終日騒ぎ廻っている。「高行」の出入の際は特に激しく力一ぱい馬房の羽目板を蹴飛ばす。明らかに「高行」を意識しての狂乱だ。ちよつとの間にすつかり腹は巻き上つてしまい、その狂乱振りは一

日とすさまじくなり、手がつけられないで、附近の農家の馬房を借りて「高行」を移すことにした。「高行」が出て行つてからは「第一世ゴジエル」は次第に落ちつきをとりもどしてゆくように見えたが、こんな或る日、高橋君がポロ(馬糞)を採りに馬房に這入つた時、突如「第一世ゴジエル」が高橋君に襲いかかり、危く首筋を咬まれているところだった。幸いタオルを首に巻いていたので、咬傷は免れたが、今までにこんなことは一度だつてなかつた。またある日農協のお客さんが来て、「第一世ゴジエル」を厩の前にひき出して供覧した時、突然耳を背負い歯をむいて高橋君に襲いかかり、危く高橋君は身をかわしたが、農協の人が手網を取つたら農協の人には何もせずおとなしく立つていたのである。

「第一世ゴジエル」は明らかに「高行」の世話をして牝馬に交配させる高橋君に恨みを抱いていたのである。人間の世界ばかりじゃない、恋の恨みは実に恐ろしいものである。

その後「第一世ゴジエル」のインポ？は全治して立派に種牡馬の面目を發揮できるようになり、誰よりも高橋君を信頼して馬産改良に働んでいる。

(筆者は元農林省種馬牧場長、現馬事協会理事、馬と犬、ろうけつ染の権威)

昭和47年度 主催者別売得金成績（市営）

主催者	期別	売得金額	1日平均	賞金額	入組人員	1日平均
旭川市	1	383,933,100	63,988,850	12,355,000	22,988	3,831
	2	467,757,900	77,959,650	14,015,000	23,862	3,977
	3	521,191,800	86,865,300	18,549,000	22,300	3,716
	計	1,372,882,800	76,271,267	44,919,000	69,150	3,841
帯広市	1	198,296,100	33,049,350	7,965,000	15,430	2,571
	1	340,466,600	56,744,433	9,330,000	19,400	3,233
	2	384,257,600	64,042,933	10,393,000	21,050	3,508
	計	923,020,300	51,278,906	27,688,000	55,880	3,104
北見市	1	231,646,600	38,607,767	7,552,000	12,300	2,050
	2	298,179,800	49,696,633	8,338,000	14,033	2,338
	3	312,211,200	52,035,200	9,679,000	11,880	1,980
	4	286,226,400	57,245,280	9,556,000	10,736	2,147
	計	1,128,264,000	49,054,957	35,125,000	48,949	2,128
岩見沢市	1	368,033,700	61,338,950	10,952,000	19,783	3,297
	2	457,926,700	76,321,117	13,248,000	22,149	3,691
	3	496,826,100	82,804,350	16,173,000	19,543	3,257
	4	521,647,600	86,941,267	15,866,000	17,557	2,926
	計	1,844,434,100	76,851,421	56,239,000	79,032	3,293
合計	14	5,268,601,200	63,477,123	163,971,000	253,011	3,048

昭和47年度 道営売得金成績

競馬場	期別	売得金額	1日平均	賞金額	入場人員	1日平均
札幌	1	1,719,038,400	286,506,400	40,240,000	75,950	12,658
	2	1,753,194,800	292,199,133	38,000,000	71,472	11,912
	3	1,722,287,000	287,047,833	41,380,000	66,387	11,064
	4	2,215,373,600	369,228,933	39,880,000	79,499	13,249
	計	7,409,893,800	308,745,575	159,500,000	293,308	12,221
岩見沢	1	817,802,000	136,300,333	22,586,000	50,890	8,481
	2	686,842,600	114,473,766	23,380,000	34,176	5,696
	3	640,518,200	106,753,033	23,660,000	27,847	4,641
	4	838,441,000	139,740,166	27,800,000	35,139	5,856
	計	2,983,603,800	124,316,825	97,426,000	148,052	9,918
旭川	1	550,031,800	119,671,966	26,440,000	28,048	4,674
	2	516,858,700	86,143,116	25,360,000	22,852	3,808
	3	672,728,800	112,121,466	27,310,000	29,500	4,916
	計	1,739,619,300	96,645,516	79,110,000	80,400	4,466
帯広	1	323,826,300	53,971,050	25,860,000	19,828	3,304
	2	345,771,800	57,628,633	27,600,000	19,190	3,198
	3	391,209,700	65,201,616	26,960,000	19,650	3,275
	計	1,060,807,800	58,933,766	80,420,000	58,668	3,259
函館	1	373,727,400	62,287,900	30,420,000	16,551	2,758
	2	584,861,600	97,476,933	34,280,000	17,809	2,968
	計	958,589,000	79,882,416	64,700,000	34,360	2,863
合計	16	14,152,513,700	147,422,017	481,156,000	614,788	6,404

昭和48年度 北海道地方競馬ばんえい番組編成要項

北海道市営競馬の出走馬の種類、出走資格及び番組編成を次の事項により実施する。

(1) 出 走 馬

一 出走馬の種類

重 種

中間種（除、軽半血種）とする。

二 出走馬の資格

(一) 地方競馬全国協会の登録を受けた馬。

(二) 新馬は、明7歳以下（抹消、再登録馬は新馬とする、なお地方競馬全国協会の認印のある血統証明書があれば13歳以下）

古馬は明13歳以下の馬。

(三) 馬 体 重 3歳 650kg以上、
4歳以上 700kg以上の馬。

(四) 馬体検査 能力調教検査に合格した馬。

(3) 出走馬の格付基準

一 取得賞金額による格付

(一) 前年度出走馬

三 出走の拒絶

(一) 外国産馬。

(二) 疫病の程度が重く、又は外観上醜い馬。

(三) 薬物検査で陽性となった馬。

(四) 出走取消をした馬は、その回の残余期間。

(五) 尋常蹄鉄以外の蹄鉄を装蹄した馬。

(六) 競走上のへき馬及び失明馬（片眼馬を含む）

(2) 負担重量

(一) 騎手の負担重量72kgとする。

(二) 馬の格付による負担重量は次のとおりとする。

	A	420kg
3歳	B	380kg
4歳	C	340kg
	D	300kg
	E	300kg

前年度最終 出走資格		A	B	C	D	4歳	3歳
本格格付							
A	420kg	60万円以上					
B	400	60万円以上のうちA取得金30万円以下					
	380	30万円以上	40万円以上				
C	360	30万円未満	40万円以上のうちB取得金20万円以下				
	340		20万円以上	35万円以上			
D	320		20万円未満	35万円以上のうちC取得金18万円以下		70万円以上	100万円以上
	300			18万円以上	22万円以上	35万円以上	
E	300			18万円未満	22万円未満	35万円未満	
4歳	280						100万円未満

(二) 格付区分に影響する取得賞金額は昭和47年度における賞金の合計額とする。但し4歳の場合は3・4歳時の合計取得賞金とする。

(三) 5歳以上一般馬の新馬はDの負担重量 300kgに格付する、但し希望馬は本年度初出走時の馬体検査で計量した馬体重により右記に編入する。

格 付	A	B	C
馬 体 重	901kg以上	900kg以下 811kg以上	810kg以上 731kg以上

二 昇格及び加増重量基準

一 本年度の取得賞金額が次の基準に達した馬は昇格及び加増をする。

ア 3歳馬は取得賞金額により組分し、80万円未満は10万円につき10kg、80万円以上は20万円

A ウ 一般馬の加増条件は取得賞金額により下記のとおりとする。

負担重量	kg 420	430	440	450	460	470	480	490	500	20万円毎 に10kg 加増
取得賞金	10万円 未満	10万円 以上	20 "	30 "	40 "	60 "	80 "	100 "	120 "	

B

負担重量	kg 380	400	410	420	440	450	460	100万円以上はAへ
取得賞金	15万円 未満	15万円 以上		30万円 以上	45 "	60 "	75 "	
		15万円 未満	15万円 以上					

C

負担重量	kg 340	360	370	380	390	400	410	420	80万円以上はBへ
取得賞金	10万円 未満	10万円 以上		20万円 以上	30 "	40 "	50 "	60 "	
		10万円 未満	10万円 以上						

D

負担重量	kg 320	330	340	360	360	370	380	60万円以上はCへ
取得賞金	10万円 未満	10万円 以上		20万円 以上	30 "	40 "	50 "	
		10万円 未満	10万円 以上					

エ 昇格馬は前級の取得賞金の $\frac{1}{2}$ を新級の取得賞金として、その階級に格付する。

オ Eは取得賞金10万円に達した馬は一般馬に編入し、Dの300kgに格付する。

カ 負担重量にかゝる取得賞金額は、1着～5着までの賞金の合計額とする。

キ 前年度農林大臣賞典勝馬は基準重量による競走において20kg加増する。

三 降格馬の取扱いについて

降格は第2回岩見沢終了後、第3回北見終了後及び及び第4回帯広終了後、ごとに行う。

(一) 移動時期までに取得賞金のない馬(最底7出走以上)又は著しく成績の不振の馬は降格することがある。

(二) 降格は現負担重量より20kg減とし、一格付下

につき10kg加増をする。

イ 4歳馬は3歳時より通算取得賞金額により組分をし、10万円につき10kgの加増をする、但し通算取得賞金額100万円に達した馬は一般馬に編入し、Dの負担重量320kgに格付する。

位の該当クラスに編入格付する。

四 希望昇格について

基準によらずに昇格を希望する馬は番組編成会議で決定する。

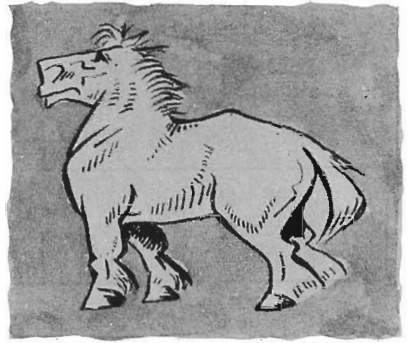
(一) 昇格馬は前格付における取得賞金の $\frac{1}{2}$ に該当するクラスに編入格付する。

(二) 編入できるのは第1回岩見沢競馬及び第3回同競馬終了時とする。

五 一般に高重量となるときは全馬の重量を一率に減ずることがある。

六 取得賞金額は特に記載のない限り前回来までの合計とする。

七 この基準に定めるもの、他番組編成上必要な事項については、番組編成会議で別に定める。



輓馬見聞録

篠沢昭 二

そめてただ眺め続けるだけであった。都会に生れ都会に育ち、何一つとしてそのような環境と係わり合いを持たない私ではあったが、馬は私の心の奥底に、幼時の頃から大きな影響を投げかけたのだ。

私はそのことよって、少しもその馬の価値が損われたとは思わなかった。なぜなら優勝した馬よりも負重量が、一二〇斤も多かったからである。残り六頭のどの馬よりも重い負担重量にもかかわらず、その馬は黙って一生懸命に曳いた。巨大な体軀には僅かな贅肉すらなかった。大きな黒い瞳には、激しい闘志と純粹な忍従との不思議な交錯があった。私は厩舎に曳かれて行くその馬の姿を追い続けた。次のレースに賭ける喧騒を極める競馬場内の熱気は、私にとつては何の感慨もなかった。

厩舎にその馬はひっそりとした、その馬は全く溫和だった。私は手を差しのべて、その鼻面を叩いた。馬の体温が私の掌に伝わったとき、その温りは、私の心に深い安らぎをもたらした。馬の眼は私を凝視するようであった、私は心の中で馬に語りかけた。

……ああとうとう廻り合ったね、僕は随分長い間探していたんだ、幼い頃から沢山の馬の中に、僕の理想とする馬を求め続けていたんだ、あるときはそれは優美なサラブレッドだった、あるときはバランスのとれたアングロ・ノルマンだった、だが僕の真に探していたのは、君のような輓馬だったんだ。来て、君に始めて出会ったとき、君のその力強い身体とその優しい心が、僕にとつてどんなに必要なものであったかが直ぐに分ったんだ。出来ることなら君と一緒に寝泊りして、一生君の傍に居たい……

私は自分の頬を、その馬の頬にこすり付けた。荒いザラザラした感触に、私はある種の陶醉を感じていた。短かい秋の日射しは急速に西に傾き、北国の冷たい夕暮の気配が忍び寄って来た。私は立ち去りかねて、その馬を凝視し続けた。その馬は無心にみじろぎ一つすることなく、すつくと立っていた。その漆黒な眼が、何か私に語りかけたように思えるのだった。

これが私の輓馬との係わり合いの最初だった。そして今こそ私の馬に対する運歴の最終の到達点に来ており、これからの私の馬への関心は、すべて輓馬に注がれるであらうことを確信した。その馬は私の心の中に、何にも換え難い感動を与えるのだった。私にとつてはレースなどはどうでも良いことであつた。その類まれな造形の美しさと、その心情の優しさに深い感銘を覚えるのだった。そして単なる空想の世界から、現にそこに存在する巨大な実体感が、私にとつては重要な意味を持つて迫ってくるのであつた。

始めて輓馬競走を見たのは、昭和四五年一〇月四日のことである。旭川の空は青く澄み渡り、雲一つなかった。喧騒な都会生活の中にいる私にとつて、それは全く別天地のことのようであつた。私はそのときその馬と出会った。第九競走がその日唯一のA級レースであつた。パドックの中を歩く七頭の馬の中にその馬はいた。青毛の馬だった。一分の隙もない緊張した筋肉に支えられたその巨大な馬こそ、私が心の中に描き続けてきた輓馬の理想像だった。私は息をひ

都会の舗装路を音を立てて、通り過ぎる荷馬車を見るとき、私は馬車とともに意味もなく歩き続けた。老いさらばえて腰骨の飛び出た馬車馬が、能力を越えた荷に耐えかね立ちどまるとき、無慈悲な馬車引きたちは、容赦ない打撃を加えるのが常であつた。そのとき私の心は氷のように凍りつき、いつまでも恐怖に震え続けていた。私にはその無抵抗な馬の姿が、この上もなくいとおしかった。そして哀れな輓馬の眼は、私の幼い心の中に深く焼き付いたのだった。

その馬は三着だった。けれども私はそのことよって、少しもその馬の価値が損われたとは思わなかった。なぜなら優勝した馬よりも負重量が、一二〇斤も多かったからである。残り六頭のどの馬よりも重い負担重量にもかかわらず、その馬は黙って一生懸命に曳いた。巨大な体軀には僅かな贅肉すらなかった。大きな黒い瞳には、激しい闘志と純粹な忍従との不思議な交錯があった。私は厩舎に曳かれて行くその馬の姿を追い続けた。次のレースに賭ける喧騒を極める競馬場内の熱気は、私にとつては何の感慨もなかった。

厩舎にその馬はひっそりとした、その馬は全く溫和だった。私は手を差しのべて、その鼻面を叩いた。馬の体温が私の掌に伝わったとき、その温りは、私の心に深い安らぎをもたらした。馬の眼は私を凝視するようであった、私は心の中で馬に語りかけた。

……ああとうとう廻り合ったね、僕は随分長い間探していたんだ、幼い頃から沢山の馬の中に、僕の理想とする馬を求め続けていたんだ、あるときはそれは優美なサラブレッドだった、あるときはバランスのとれたアングロ・ノルマンだった、だが僕の真に探していたのは、君のような輓馬だったんだ。来て、君に始めて出会ったとき、君のその力強い身体とその優しい心が、僕にとつてどんなに必要なものであったかが直ぐに分ったんだ。出来ることなら君と一緒に寝泊りして、一生君の傍に居たい……

た。鞍馬たちもその競争本能をむき出しにして、互にその能力を競いあった。私は三の障害の傍に立ちながら、それらの馬たちの躍動する逞しい筋肉の瞬発力を凝視した。それは本レースとは較べものにならない苛酷な運動のように思えた。

私には馭者たちの手に持たれた鞭が、この上もなく恐しいものに見えた。太い檜の丸棒の先に付けられた、一米を越す革鞭。それだけではない、その先端にはさらにかねの鎖が二〇程程付けられていた。馭者たちはその鞭で、情容赦なく馬の後軀を鞭打した。鋭い革の唸り、馬の皮肉の上で炸裂する激しい響き、私にはその馭者たちが、地獄の鬼のように見えた。それは都会の生活しか知らない私にとつては、想像を絶する光景だった。

打擲を受けた鞍馬たちは、狂気のように興奮しさらに激しい闘志を見せた。頸、胴、腰、脚、それらは一つに連繫した筋肉の緊張を作り出し、激しい息使いとともにその高い障害を登りつめた。馬たちは一瞬その緊張を解くようであった。しかし間髪を入れずに打ち込まれる最後の鞭に、一気に障害を駆け下りた。鼻孔から出る息と、万身から吹き出す汗は、馬たちの

姿をかき消すかのように、大気に発散し続けた。いつしか地平線には大きな太陽が昇り始めていた。

私にとつてこの始めて見る鞍馬の調教は、私の脳髓深く釘を打ち込まれたように感じさせるのであった。それは私自身も含めて、都会人の持つている、動物に寄せる愛護精神の脆弱さを、根底から覆すものようであった。すなわちわれわれの馬に対する愛情など、一片の感傷に過ぎないことを思い知らされたのだ。鞍馬の持つ底知れないエネルギー、それらをぎりぎりまで汲み尽すためには、

鞍馬が強靱であればある程、人間も苛責なくそれらに対抗しなければならなかったのだ。あの鞭の強打も、緊迫した状況の馬たちにとつて見れば、ともすれば下降しようとする能力の限界への挑戦を、再び開始させる契機に過ぎなかったのだ。そしてそれこそ都会人には求むべくもない、人間の原始本能の現われなのだった。

朝日は爽かに照り映え、僅かに残された雑草の露は光り輝いた。三三五五と厩舎へ戻る鞍馬たちは、今は平穏で満ち足りていた。日に焼けた逞しい馭者たちも、和やかに談笑し合った。私は思考だけを頼みとする私自身の生活が、これ程忌わしく思えたことはなかった。

そしてここには鞍馬を通して、人間の全うな卒直な生涯があり、それこそ現代人が最早喪失してしまつたものなのだと、強く感じるのであった。

三

馬について知ることは、結局は人間について理解することだと思ふ。私はある人の紹介でS氏と会うこととなつた。S氏は馬車追いを職業として過して来た人である。

S氏と始めて談合したのは、あの馬を見た翌晩のことだった。五〇歳を越えた男ざかりのS氏は、背丈こそ高きはなかったが、恰幅の良い逞しい身体付きであった。それは丁度、鞍馬のもつ風格とどこか似ていた。

S氏は寡黙だった。そして彼にとつては東京から来た私が不審そう、いかにも固苦しうに見えた。全く異つた環境に住み、全く異つた生活を送っている初対面の私を、そう簡単に気を許すわけにはいかなかったらうから、それは無理もないことであつたに違いない。しかし私は鞍馬に関係しているS氏以外のどんな人と会おうとも、S氏以上の強い印象を抱くことはなかったらうと思ふ。私はS氏と最初に接し合えた偶然を、この上もなく好運なことだと考えた。

われわれの間には、共通の話題

は一つしかなかった。つまり馬について語ることである。私はできるだけ飾らずに、馬についての見聞や意見を述べた。私は最後にこう結んだ。「分つて下さいSさん。私は本当の鞍馬を見て、鞍馬こそ私のもつとも望むものであることを、あらためて知つたのです。私は鞍馬については全くの素人で、何の知識を経験もありません。けれども私は強く惹かれるのです。だからどんなことにも興味があり、どんなことでも知りたいのです。どうか教えて下さい」

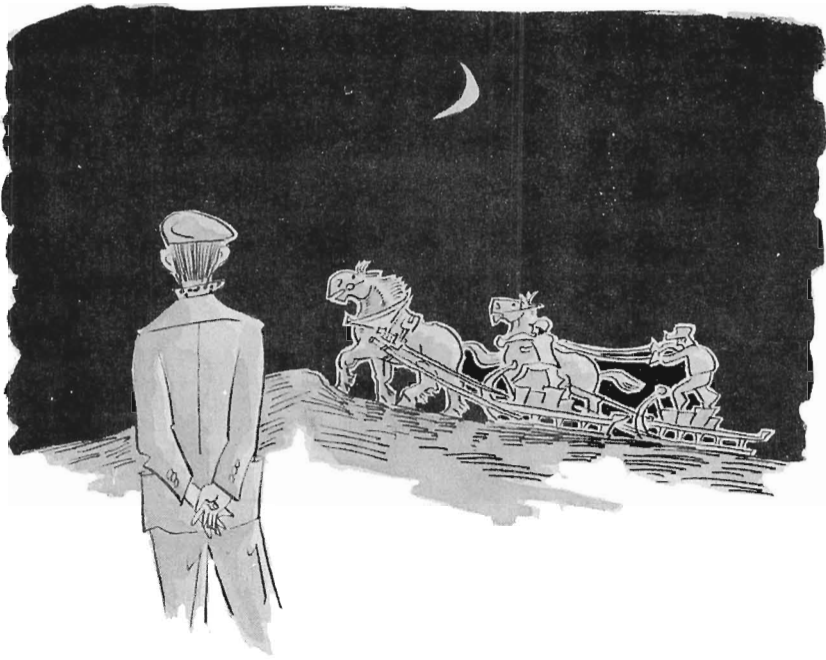
私はそう云いながらも、S氏と私の間の距離の遠さを感じていた。私が鞍馬に抱く感情がどんなものであれ、私は鞍馬と一日たりとも共に過したことはないのだ。そんな人間にとつて、どうして真の理解などあり得よう。それは私の専門分野について、多くの素人から受ける質問の愚劣さに、閉口させられるのと同じ筈であった。しかしそれがどんなに的外れなものだつたにせよ、私の鞍馬に傾斜する気持は決して偽わりではなかった。S氏は言葉少なに語つた。

「あなたの気持は分りました。私は北海道に生れ、幼い頃から鞍馬とともに過して来ました。そしてそれ以外のことは何もできず、また別の仕事をする気もありません。

私の息子はもはや別の職業についていますから、私一代で終りとなるでしょう。その上淋しいことには、鞍馬は北海道でさえも機械とつて代えられようとしていきます。しかし私の生涯は鞍馬によつて支えられ、ときによつては肉親以上の絆の強さを抱かせたのです。なぜだか分りますか。それは鞍馬は信頼した人間を、決して裏切ることをしないからです」

「なるほど馬は経済動物であり、その機能が失われれば容赦なく潰されて、別の馬にとつて代られ、人間はその能力だけを利用し尽くすだけで、その生涯を保証しないでしょう。あなた方は屠殺場でその生涯を終えて行く鞍馬を哀れだと思ひ、また激しい労役のために酷使する馭者を、残酷な人間と考えるかも知れませんが、それはわれわれが生きていくための闘いなのです」

私はS氏を凝視した。いまは柔和に端々と語る表情の中に、おかし難い厳しさを見た。私にはまだS氏の馬と共に過した生涯が、実感としては理解できなかつた。しかし私がこれから学ばねばならないことは、むしろ鞍馬それ自体ではなく、鞍馬と共に生きた人々についてであると思つたのだ。そして眼前にいるS氏こそ、私に



とつてもっとも重要な人物となるであろうと考えた。

話はまだ続けられて行き、私を魅了したあの馬の持主がS氏だと分ったとき、私の鞍馬との運命的な出会いは、今こそ完結しつつあるのだと思つた。そしてS氏を通じて、私の鞍馬に対する愛着は、ますます強固なものとなつて發展して行くに違いないと確信したのである。

四

年が交つてまた鞍馬競走の時期となつた。私はレースの出場資格を得るための条件となる、鞍馬の能力や調教状況を審査する、いわゆる能力検定を見学することを目的として、再度旭川を訪れた。五月下旬の北海道は春甜わで、軟らかな陽光がさんさんと馬場の中へ降り注いでいた。私は一眼であの馬がいるのを認めた。良く手入れされた毛並は黒く光り輝いて、多くの鞍馬の中に君臨していた。そしてS氏は私を見て、にこやかに微笑んだ。

私は大部分の時間を厩舎と馬場の中で過し、あの馬とS氏と行動

を共にした。私は馬が持主といかにその性質が酷似するかというところを、身を以て知つたのだつた。

その馬は温和そうに見えたが、激しい悍性がその中にあり、見知らぬ人には決して馴れることはなく、その底知れない力を内に秘め、冷静で優しかった。そしてどんな負担にも黙々と耐えるだけでなく、より以上の闘志を燃やす様は、真の男が見せる快気にも似ていた。私にはそれがS氏の人柄のように思えるのだつた。

厩舎の中にはいろいろな人が出入りした。家畜商、馬主、獣医、蹄鉄師、馬具商、それらの人々の織り成す人間模様は、もちろん私にとつては珍しい見聞の連続であつたが、その中には虚飾のない人生を見てとつた。たとえば馬主たちは、どんなやくざな馬を所有していたとしても、その馬の能力やレースの駆け引きの自慢には、稚気に満ちたものがあり、むきになつて論争する様は、微笑を招うものがあつた。人間のつと狡猾さや好色さでさえ、それらの人々が見せる態度は卒直なものであり、裸

の人間性が旺盛していた。

私はその馬と共に過せば過すほど、それが傑出した逸物であることが分るようになった。S氏の調教の技量が人並秀れたものであるに違いないとしても、コースの平坦部分を休むことなく安定した足取りで進む様子や、障害における力の配分の絶妙さや、ここ一番で見せる集中力、瞬発力には、外どの鞍馬にも見られない素晴らしい素質があり、そして八歳という年齢は、その最盛期を迎えようとしているようであつた。

私はS氏についていろいろのことを学んだ。その馬も含めて性格の異なる鞍馬を調教する過程を、馬場の中で追い続けた。馬なりにその能力を発揮させるS氏の技量が私のような素人にも外調教師と異つて理解できた。時によつては馬へ与える徴戒が私には厳し過ぎるよう思えたが、そこには馬へ対する深い愛情があり、何よりもその真剣さに私は打たれたのだつた。私はS氏の中に専門家としての卓越さだけでなくその人間性についても深い感銘を

受け、そして私に対して次第に打ち解けた態度を示して呉れることが、何ものにも勝る喜びとなったのだった。

旭川を去るとき、最後にその馬を飽きることなく眺め続けた。私はその馬が考えることを知りたいと思つた。しかし私にとつてどんな交流の方法があつたらう。私はその馬に対する無力さを残念だと思ひ。無言で向ひ合っているだけで、最後の時が過ぎ去っていくのを、黙つて無心に見守るほかはなかつた。

私は三日間ではあつたが、充実した時を過ぎて帰京した。だが何と云うことであろう。私の耳に届いたのは、あの馬は北見で伝賃に罹り、昭和四六年七月二七日薬殺されたという便りだつた。私は花の盛りを迎えながら、静かにこの世を去っていく様を思い浮かべるとき、どうすることもできない無念さを感じるのだつた。そしてS氏の氣持を察して、肉親の不幸に出会つたときのように、胸が痛むのだつた。私の眼の前には、あの馬の雄々しい姿が幻のように通り

過ぎて行つた。私の鞍馬へ寄せせる関心は、さらに強固なものとなつたことを感じ、誰よりもS氏に会いたいと思つた。それは骨肉愛にも似た熱い感情であつた。

五

あの馬の死の便りを聞いてから半月後、私は再び北海道へ旅立つた。そして八月のある日、S氏と私は十勝岳の麓にあるトムラウシ温泉へ行つた。夏の盛りは過ぎかかつており、新得から遠い道程は人氣もなく静寂そのものであつた。美しい溪流は道と交又してどこまでも続き、無心に飛び交う蝶の姿が、私の旅情をかき立てた。S氏は物静かに語つた。

「今度の伝賃騒ぎで私は四頭の馬を失いました。中でも私のもつとも頼みにしていた馬が駄目だと思つたとき、私は自分の力が潰えていく思ひでした。私はもう若くなく、この仕事もあと一〇年が限度でしよう。でも氣を取り直して進もうと思つています。私の生涯はそうでなくても、それなりに波乱に満ちたものであり、いろいろな体験をしました。どん底の状態

に何度も陥り、人間の愛憎についても辛い思ひが沢山あります。それらはあなたに話してもとても理解できないことでしょうが」

「Sさん、それは私にしても同じことです。人の一生などどのみち苦惱を背負つて行くのですから私はできるだけ飾らずに、自己の挫折について語つた。このようなことは肉親にできえ決して話すこともなく、その傷口は誰にも見せたくないことなのであつた。S氏にこんなことが語れるのが不思議だつた。

「私にはあなたの体験など苦勞のうちには、はいらないように思えます。乏しい金をはたいてやぐざな馬を買い、人里離れた酷寒の山奥の飯場に暮して、造材の激しい労働の連続、半年近くも妻子にも会はず、わずかに酒だけで気分をまぎらわし、こんな状態を得た貴重な金も、たつた一晚の博打で騙しとられ、馬まで失つて妻子のもとへ帰らねばならない無念さ、借金ばかりで馬も買えず、親方に雇われてさらに無能な馬と共に夏場の道路工事、碎石で指先は

血にまみれて、馭者綱さえ握れなくなるような生活、それが若氣の過ちだといつてしまえばそれまででしょうが、人間の関係もそんな状態が続けば、ますます荒んで破局がやつてきます。そんな中にも、私には馬を取り扱かう以外何もできなかったのです」

私は見たことはないのだが、雪煙りを立てて降り下る鞍馬と、静かな大氣の中に荒々しい掛声をかける馭者たちの姿が、鮮かに私の心の中に浮かんだ。そして男の持つ逞しい力と、激しい氣迫が充満する中で、それに応えるべくすべての筋肉を凝集させて、輓曳する雄々しい馬たちを見た。それは将しく現代人が失いつつある原始の闘争本能であり、人間の躍動する生命力に外ならなかつたのだ。そして今その幻影がわずかに輓曳競走の中で、生き伸びようとしているのだつた。

時代は變つて行く。私は現在の安定したS氏の横顔を眺め続けた。日に焦けた太い首には、それらの風雪を耐え抜いた年輪があり、なお強靱に保たれている身体には、

ずつしりとした人生の重みがあつた。そして今こそ私は、人間と鞍馬の織り成す情念の世界が、理解できたと思つた。馬を愛することそれはS氏の一生賭けた真剣勝負だつたのだ。

幾重にも連なる深い山なみのかたに、巨大な太陽が沈んで行くうとしていた。われわれは無言だつた。しかしS氏の暖かい心の鼓動が、私に伝つてくるように思へた。全く異つた環境に住み、全く異つた仕事をし、全く異つた生活を送つて、たかだか年に一度会えるかどうか過ぎないのに、誰よりも卒直に話し合え、誰よりも信頼し合えると感じるのも、すべてあの馬がその機縁をとり結んで呉れたように私には思えるのであつた。私の鞍馬への遍歴は、今新しい出発点を見出し、見聞録から輓馬を通じての交友録へ、展開し始めたことを強く感じたのだつた。

辺りは夕闇に包まれ、静かに夜が忍び寄つていた。 (完)

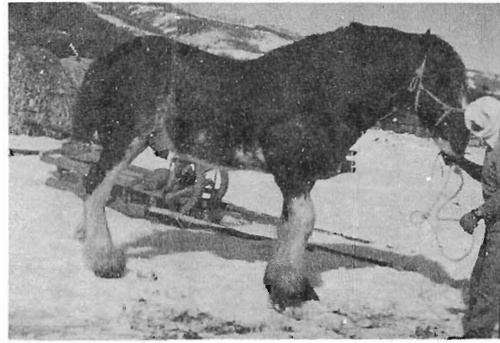
(筆者はさる大手メーカーの電気技師、ばんえい競走の大ファン但し馬券はきらいで一切買わない)



端野町宇忠志 能谷造材 2月27日写
(中村信氏提供)



ベルジン種



輸入クライズデル種 壮瞥町森牧場

昭和四十八年度賞金・諸手当

<p>出走馬一頭につき次により支給する。</p> <p>岩見沢市・旭川市</p> <p>A級 一三、〇〇〇円 B級 二〇、〇〇〇円 C、3才 一八、〇〇〇円 D、E、4才 一五、〇〇〇円</p> <p>帯広市・北見市</p> <p>A級 二一、〇〇〇円 B級 一八、〇〇〇円 C、3才 一六、〇〇〇円 D、E、4才 一三、〇〇〇円</p> <p>○ 着外手当</p> <p>競走番組で定める以外の着外馬に対し、一競走につき次により支給する。</p> <p>特別・重賞競走</p> <p>A級 五、五〇〇円 B級 五、〇〇〇円 C級 四、〇〇〇円 D、E、4才 三、〇〇〇円 3才 四、五〇〇円</p> <p>普通競走(六ノ八着)</p> <p>A級 四、五〇〇円 B級 四、〇〇〇円 C級 三、〇〇〇円 D、E、4才 二、〇〇〇円 3才 三、五〇〇円</p> <p>○ 騎手賞</p> <p>特別・重賞競走</p> <p>一着 六、〇〇〇円 二着 五、〇〇〇円 三着 四、〇〇〇円 四着 三、〇〇〇円 五着以下 二、〇〇〇円</p>	<p>○ 調教師賞</p> <p>調教専業</p> <p>一着 一〇、〇〇〇円 二着 八、〇〇〇円 三着 六、〇〇〇円 四着 四、〇〇〇円 五着以下 三、〇〇〇円</p> <p>調騎兼業</p> <p>一着 五、〇〇〇円 二着 四、〇〇〇円 三着 三、〇〇〇円 四着 二、〇〇〇円 五着以下 一、五〇〇円</p> <p>○ 歴舎管理者手当</p> <p>歴舎管理者に対して次により支給する。</p> <p>△五頭以上一〇頭まで管理するもの</p> <p>五、〇〇〇円 △一頭以上管理するもの</p> <p>八、〇〇〇円</p>
--	---

夢の競馬

北見市畜産主任技師

坂井清治

私たち競馬の実務を行っていて苦勞するものに着順の判定がある。今でこそ写真がありそれを参考に決めて決定出来るから良いけれども昔は一団になって入線したものを、目だけで見分けるのは、なかなか骨が折れた。

特に「ばんえい競馬」では、到達順位は馬槌の後端だけに、馬体が入線していなから止ったりして、その間に他馬に追い抜かれたりすると、本当に判定に苦勞をした。

ファンや番組編成委員には悪いが、着順に座っていると、こんどのレースは「ダンゴ」にならないうように祈ったものだ。ゴール近くになってバラバラになっていると安心して見ていられるが、「ダンゴレース」になると、ハラハラし、確定し終るとホットして身体の気が抜けて行く感じだ。

だが、どうして馬はあんなに固まってゴールに入ってくるのだろうか？

単に能力的に同じようなタイプの馬が集まったからダンゴになるのだろうか？

私の勤務する北見市では市営の牧場を持っている。

毎年北国でも若草が出る六月、地元農家が今迄自宅で管理していた牛と馬を、この牧場に放牧する。健康検査をし、消毒をし、計測をして、これらの家畜は牧場の中に放される。好きな時に草を食べ、好きな時に水を飲んで、今迄全く顔も知らなかった牛や馬が、その日を境にして一つの家族のように生活を始めるのである。知らない馬同志を、牧場以外の処で一諸にさせると、蹴り合ったりするが、牧場内ではそんなアクシデントは見受けな

見受けない。放牧して二、三日も経つと、あちこちに、町内会の井戸端のような集団が出来る。牛は牛どうしで二、三〇頭づ、が一固まりになる。しかし牛と馬とはその集団の仕方が異なる。その密度、固まり具合が違うのである。

馬は全馬が一固まりになるが、牛は、ばらばらに固まる。馬は一頭が先になって走り出すと、その後ろに全馬が、蹄音も高く続いて行くのでその集団の中から一頭をとらえることは、二、三日も経過すると全馬を移動させなければむずかしくなる。

競馬でゴールに一団となってなだれ込むのは単なる競走能力だけではなく、先に走っている馬に追いつき、一諸に生活しようとする集団性の本能の為ではないだろうか。動物学的には、自己防衛力の弱い動物程集団性になると云うが、競馬では、能力不発揮と云うことが騎手の手網によって生起する事があるが、思い切つて手網なしで鞍にしがみつかせて馬を走らせて競走をしたら、仕かけ遅れも、ため殺しもなくなり集団性に基因しないだろうか。

そんな馬の本能だけの競馬は夢だろうか。

普通競走

- 一着 五、〇〇〇円
 - 二着 四、〇〇〇円
 - 三着 三、〇〇〇円
 - 四着 二、〇〇〇円
 - 五着以下 一、五〇〇円
- 〇 歴務員賞 (取扱いは四頭まで)
- 一着 三、〇〇〇円
 - 二着 二、五〇〇円
 - 三着 二、〇〇〇円
 - 四着 一、五〇〇円
 - 五着以下 一、二〇〇円

出走報償金

本年度最終の岩見沢競馬に出走した競走馬一頭につき

- 三、五〇〇円

特別報償金

〇 出走投票するも、その競走が不成立になった場合には、その競走の五着賞金に相当する金額を出走投票をした馬に支給する。但し、一万円を限度とする。

〇 同枠除外の場合には当該競走の三着賞金相当額を支給する。

〇 災害その他で競馬が中止になった場合には、賞金、着外手当を出走予定頭数であん分して支給する。

昭和47年度リーディングジョッキー



木村騎手

順位	騎手	1着	2着	3着
第1位	木村	48	31	26
2	山田	38	32	31
3	中西	30	38	37
4	片平	29	37	17
5	水山	33	23	32
6	山本	35	21	17



山田騎手

1 入厩馬記録を更新

初回開幕の帯広入厩馬は六一三頭、年間入厩実頭数は六三二頭に達し、昨年の記録五四頭を更新した、体重も五歳以上七〇〇キロ以下は僅かに三頭、四歳馬では一頭もなし、質もよくなった。

2 北見仮厩舎を急増

全般の馬頭数増加に対するため、北見市では五月下旬から一ヶ月半の短期間でパネル式仮厩舎九七馬房を急遽造築した。

3 パトロールVTR

専門商社に委託

昭和四十四年以来主催者直営方式でやってきたVTRは本年度から専門商社に委託、業者の馬淵氏はサービスとして、第一回帯広日分をカラーで撮影、そのほかテレビで放送されたばんえい競走などもカラーテープに収め、今後の資料とした。

4 後面パトロールタワーの設置

VTRは従来ゴールと走路中間タワーからいづれも側面撮影であったが、本年度から発走線後方に一台を移設、スタートからゴールまで常に全馬を画面におさめるよう改善した。

5 奥原会長岩見沢競馬に來場

地方競馬全国協会奥原会長は岩見沢第一回第一日に來場、ばんえい競走りーデングジョッキー賞を授与の上、競走を視察。

6 競馬監督

六月二十四日岩見沢には田口、植田両氏、九月二十四日北見には橋本、加藤両氏の各監督官が來場、懇切な指導と講評があった、ばんえいは始めてといわれる橋本氏が多数の名士も列席して盛会であった。

8 奥原会長再度岩見沢に

全国協会奥原会長は九月一日岩見沢競馬創立五十周年記念式典に再度來岩され祝辞文そつちのことで岩見沢市が官民あげて競馬を愛し、壮大な競馬場を建設して競馬の公正化につとめ、今日の隆盛をもたらした功績を讃える名調子の祝辞を述べられ、二百余名の出席者に多大の感銘を与えた、当日は道の柴田農務部長、川村前市長そのほか



「この競走を見て馬を感じた」と挨拶されたのは印象的。

7 中村理事は旭川ばんえいに

地方競馬全国協会中村理事は抽山業務課長と共に、七月九日旭川ばんえい競馬に來場され、久々のばんえい視察でスターテングゲートから飛び出す馬から、ゴールまでを一日中熱心に視察し翌日空路帰京。

9 帯広市農政課長欧米視察

帯広市花房農政課長は全国公営競馬主催者協議会の主宰する国外競馬視察団に加わり九月中旬米国の各競馬場を視察、あわせて欧州の酪農を視察の上十月上旬帰国。

10 北見競馬場工事進捗

昭和四十四年用地買収、四十五年整地工事に着手してから三年目、若松町の丘に建設中の新設北見競馬場は本年二十六ヘクタールの整地工事を完了、翌四十八年は一挙に建造物全部を完成する予定である、十月三日調教師と同行して視察された全国協会専門職員の方が「四回では足りないな」と嘯やかれたのも、北国の大自然の中にひろげられたこの工事が、いかに大きく見えたかを物語るもの。

帯広市は競馬場施設整備基金条例を制定、全七条よりなるこの条例の施行によつて近い将来競馬場を新設整備する計画を具体化した。

11 帯広市競馬場整備条例を制定

懸案の旭川競馬場移転新設問題は、市と現在の所有者上川生産農協連との協議が進み、かねてから候補地を物色中であつたが、本年末、用地を買収した、愈々四十八年整地工事にかかり、工作物の建設にも着手、或は四十九年秋の開催に間にあうかといふ。

12 旭川市競馬場移設用地を買収

初夏の旭川競馬開催中七月十日から二十日まで、初めての地方競馬全国協会主催騎手講習会が開催された、講師は若月調査役、川村、浅井専門職、受講者は主として、若年騎手と受験希望者、科目によ

13 初の全国協会主催騎手講習会

北見競馬に始めてテレフォンサービスが登場した、これは電話を呼び出せば、自動的に電話器が、その翌日の出走馬を教えてくれるというものである。

14 本会主催の騎手講習会

九月二十六日北見競馬開催中に開催、講師は本会職員、受講者約百名。

15 北見のテレフォンサービス

本州競馬主催者の視察しきり

16 本州競馬主催者の視察しきり

群馬県競馬組合の職員、事務局長及び役職員は六月の北見と、七



川村講師と講習生たち

月の岩見沢に、栃木県（宇都宮、足利）は第三回岩見沢、中津競馬組合の職員事務局長は第四回に來場、この珍らしい競馬を興味深く且つ熱心に視察された。

17 第二十一回

東日本産馬大会の開催

第二回帯広競馬開催中の八月七日、日本の馬産に大きな足跡を残してきた東日本産馬大会は、その第二十一回を十勝農協連共進会式場において開催、農林省はじめ関係官庁、関係団体の來賓臨席の中で議案八件を審議、産馬功勞者として三十八名の表彰があった。本会提案のばんえい競走馬資源確保対策も議案として提出採択され、本会事務局長も功勞者の中に名を連らねた。



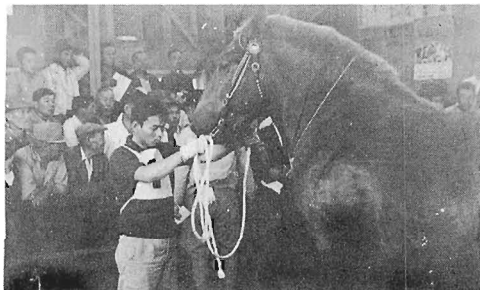
18 本会職員、共進会市場を見学

七月五日砂川畜産センターで開催された第八回北海道育成馬共進会には本会事務局長と光石囑託（事務援助）が出向き視察、さすがに陳馬は堂々たるものだが頭数は十九頭「昔はこの会場にピッシリ入ってお祭りみたいだったのに」と光石氏、当日はあいにくの小雨そぼ降る暗い日で、何にか時代を思わせる寂漠たる思いであった。ところがセリ市となると買入見物人が二百人も集まり場内にあふれ、人気は大変なもの。

こちらは八月開催の池田二歳馬市場には中休みを利用して串岡、岩崎、工藤の三名が見学、出場馬二五〇頭中最高六十三万五千円最低四万円、四十万円以上十頭、三十万円以上十三頭、二十万円以上百三頭だった。なお七月二十八、九日開催の北見共進会市場には牛馬羊豚二三〇頭馬四十頭が出場、多数の調教師諸君が外出許可書を貰って見に行った。

19 帯広・旭川に電光掲示

とりはずし運搬自由の電光掲示が、帯広市とVTRの馬淵氏のア



砂川の共進会セリ市

イデアで、八月十五日帯広競馬場に取付けられた、従来のものには比較して損色なく、秋の旭川でもフアンの前にお目見得した。

20 市宮旭川競馬創設二十年

市宮旭川競馬創設二十年記念式典は十月十八日銀座ビルにおいて挙行、旭川市長の式辞があつてから地元選出の代議士、市議会代表、関係団体長などの祝辞祝電があつたが、いづれも本道ばんえい競走のメッカとして今日の隆盛をみた市宮旭川競馬の努力をたたえ祝福し、特にこの日は、競馬場移転新設を旨指す決意と要望が織りこまれていたのが注目された、市は永年の功勞者として上川生産農協連と協力会に対し感謝状及び記念品を贈った。

21 岩見沢競馬開設記念行事

岩見沢市は競馬場開設五十周年市宮発足二十年を記念して、多様な祝賀記念行事をくりひろげた。

- 一、記念誌の発刊
- 二、岩見沢競馬の歴史を語る座談会一月二十五日市民会館にて開催
- 三、競馬場内外記念植樹
- 四、納涼花火大会 八月五日午後八時から一時間、競馬場に

おいて開催、あいにくの小雨であったが、入場者九、六三〇名、車一、三一八台が押しかけ、打上げた花火三百発、大変な盛会であった。

- 五、乗馬クラブ、競馬場内に設立、現在乗馬六頭、会員五十三名、馬場内に馬術馬場建設のため整地を完了。
- 六、記念式典祝賀会の開催、九月一日市民会館において挙行、出席者二二〇余名。
- 七、記念レースは九月十日第二回市宮競馬第九レースに挙行、A級優勝八頭が出走し、優勝のカツタローは賞金百万円と市長大賞杯を獲得した。

22 お嬢さん誘導馬の登場

旭川では昨年に引続いて福田早苗さん（十九歳）が、全期間岩城氏所有の栃栗班馬に跨って、重鞍馬を馬場に誘導（旭川乗馬クラブ所属）岩見沢では今喜美江さん（二十三歳）斉藤まゆみさん（二十歳）がさっそうととして登場、本年はじめてとあつて、男子会員と交代してやったが、重賞競走には二人揃って出走馬の隊列を先導、真赤な乗馬服は場内をパッと明るく楽しいものにした、岩見沢乗馬クラブ所属。



さっそう福田早苗さん

23 雪馬場三十七秒四

本年最終の第四回岩見沢第四日
目(十一月六日)は朝からの降雪

で、一面白銀の雪景色、除雪され
た走路だけがクッキリと黒く浮ん
だ、降りしきる雪はあとからあと
から走路を白くし、この日のレー
スで一分以上かかったものは一ツ
もなし、第六レース三歳特別では
三七〇キロしよって一着ユウテン

大友騎手、二着ヤマトサカエ前原
騎手となったが写真判定の結果三
十七秒四の同タイムでばんえい競
走発足以来のレコードを作った。

24 引退馬表彰

同じ日、ことし十三歳の満年令
に達した馬十三頭の引退記念表彰
式が岩見沢競馬であった。頸飾に
かざられた馬群は女性騎手二人に
前後を守られて馬場内に入場、折



雪の中の引退表彰

25 騎手試験

十月十六日から十九日までの四
日間、旭川競馬場で実施された。
試験委員は全国協会野呂調査役、
野口、竹中専門役、受験者一〇一
名。

から降りしきる雪の中で、小島執
務委員長から夫々表彰状、記念品
を受け螢の光の曲に送られて去っ
ていった。

26 秋のインフルエンザ予防接種

十一月二十一日、本会主催で開
催、道から高橋、長井技師、生産
団体からはホクレン邦須、農協中
央会、越沢、馬事協会村山、十勝
農連協、永田、ホクレン北見支所
堀内の各氏が出席、市からは北見
市久田経済部長ほか各市課長職員
が出席し、さきに樹立したばんえ
い競走馬資源対策について懇談し、
これを全面的に支持推進すること
を申合せた。

27 馬資源対策懇談会の開催

岩見沢市では本年度ばんえい競
走全日程終了の翌日十一月十四日
在厩馬三四一頭に對しインフルエ
ンザ予防接種を行った。

28 騎手教本できあがる

二月脱稿原稿を送付のところ去る
二月完成した。
A4判の立派なもので、平地の
それに比較して倍も大きく、馬も
大きいから教本も大きいのだと、
主催者も常に変らぬ協会の好意に
感謝大よこび。

30 旭川の競走馬事故

帯広市では執務委員章の副章と
してワッペン胸章を作製し執務員
に配付、これをつけていると、帰
るときなど執務委員名を明記して
ある執務員記章をはづしていても
出入口を通過でき、便利なアイデ
アと好評。

29 執務委員章にワッペン

第三回旭川競馬初日第一レース
で三歳のマサル号(片平騎手)はスタ
ート後第一障害前で突然でん倒、
そのまま死亡した。
本年ただ一回の競走中の事故死
であった。

昭和47年度種雄馬ランキング

順位	種類	馬名	登録頭数	勝鞍	取得賞金	おもな出走馬名			
1	ベル	オナシス	9	19	6,945,000円	カットロー	ダイニミハル	ノーチカル	
2	ベル	ゴジエール	17	35	6,846,500	ハナタカラ	ナルゼン	ノーチカル	ライマンオー
3	ベル	ベルヴオンシェー	21	24	6,694,000	ミサイルキング	リッケイ	ギョクリュウ	
4	ブル	モグイ	2	8	4,222,000	シヤリイチ			
5	ブル	ブリジャドウ	11	15	3,715,000	タカマスゴ	アサヒトップ		
6	ブル	ケルネヴエーズ	3	13	3,520,000	タカラコマ			
7	中半	ハ条	2	10	3,466,000	ジヨウホウ			
8	ブル	オラテール	6	22	3,438,000	タカラ第一	モリヒカリ		
9	ベル	オデオン	17	15	3,299,000	シュクハイ			
10	ベル	ウルバン	11	19	3,281,000	シニアポロ	イシカリハヤテ		

昭和47年度3才種馬雄馬ランキング

順位	種類	馬名	血統	登録頭数	勝鞍	取得賞金	おもな出走馬名		
1	ブル	ロイヤル	ブルフーサー ブルジアット	6	6	1,820,000円	メジロアサヒ		
2	ベル	ウルバン	ベルイボワール ベルラビット	7	6	1,795,000	イシカリハヤテ	ダイキング	
3	中半	ナオス雄	ブルナオス 中半芳梅	1	7	1,727,000	バンユウバ		
4	ブル	鉄鯉	ブルアンバレー ブルキヤロリーヌ	4	7	1,255,000	ロンブウ	リシウ	
5	ベル	タンブー	ベルオレンジ ベルロクエル	4	5	1,164,000	シュンオー		
6	ベル系	第一ゴジエール	ベルゴジュール 重系宝玉	1	4	898,000	アキタカミカゼ		
7	ブル系	第28コリガン	ブルコリガン 中半恵更	1	4	878,000	ニホンマル		
8	ベル	信仲	ベル笛真 ベル系秋伶	1	4	847,000	カイキオー		
9	ブル	ウレマ	ブルクログマ ブルパシアンヌ	5	9	827,000	ユウテン	チロル	
10	ベル	アプレス	ベルロシエ ベルサンシブル	7	7	729,000	アキタコマ	フアスター	

昭和47年度4才種雄馬ランキング

順位	種類	馬名	血統	登録頭数	勝鞍	取得賞金	おもな出走馬名	
1	ベル	タンブー	ベルオレンジ ベルロクエル	4	10	2,029,000円	コマバ	テンタン
2	ベル	オデオン	ベルジヨリクール ベルシヤルマント	4	5	1,524,000	シュクハイ	ゴーセイダイ
3	ベル	ウルバン	ベルイボワール ベルラビット	4	13	1,486,000	アラワシ	シニアポロ
4	ベル系	緑宮	ベルロジ ベル系宮角	1	3	1,086,000	ラクショウ	
5	ベル	新鳥	ベルベルヴオンシェー ベル海鳥	2	6	961,000	シゲノハラ	フランテンリュウ
6	ベル	ベルヴオンシェー	ベルイテム ベルダム	4	3	946,000	イサミヒメ	
7	重半	晏榮	ベルアンクリュー 中半ヴエールノニ	2	2	819,000	バンコマ	
8	ベル	オナシス	ベルクウン ベルアンスタンクテイウ	3	4	778,000	フジキリン	
9	重半	龍博	ベル系協博 中半繁竜	2	3	712,000	カンリュウ	
10	ベル	第三芳星	ベルニジエリア ベル第一タマヒメ	1	2	599,000	レンフクゴ	

ばんえいの華

豪快ノ重鞍A級の熱戦譜

☆ 岩見沢農林大臣賞典

(一着賞二〇万円)

第三回第五日目第九レース

- 1着 シャリイチ 山田
 - 2着 ジョウホウ 片平
 - 3着 タカラコマ 尾ヶ瀬
 - 4着 カツタロー 金山
 - 5着 ダイニミハル 山本俊
 - 6着 リツケイ 西本
 - 7着 キンシヨ 光富
 - 8着 ホクリキ 上ラ山本
 - 9着 シンハヤサ 鬼頭
 - 10着 タカラオー 木村卓
- 積載重量オール八〇〇キロ
スタートはシンヤ、おくれ気味で、他馬は一斉に飛び出す。
第一障害で全馬一線となり息入れ、先頭シャリ、ジョウとこえ、そのあとえコマ、タロー、ミハルがつづく、第二障害はジョウ、シャリ先行、や、離れてコマ、タロー、ミハル、キンの順となる。
- 第三障害で後続の各馬も追いつき、全馬一線の先陣争いとなる、先づシャリこえ、三〇米でジョウ、二〇米でコマ、四〇米おいてタロ

ーとなり、そのあとミハル、キン、リツケ、ホクの順でこえ、シンは先行馬がゴールに入る頃漸やらこえた、オーは登坂に苦しみ左右によじれ胸引またぎ下そり補正、いとこなし、先頭をいくシャリはしだいに脚速落ち、他馬県命と追って接近したが遂に逃げ切りそのま、タイム三分四十七秒五。

☆ 旭川二〇周年記念

(一着賞一〇〇万円)

第三回第六日目第九レース

- 1着 タカラコマ 尾ヶ瀬七七〇
- 2着 ジョウホウ 小瀬 八〇〇
- 3着 キンシヨ 光富 七五〇
- 4着 シャリイチ 平田 七九〇
- 5着 リツケイ 上ラ山本七五〇
- 6着 カツタロー 金山 八〇〇
- 7着 タカラオー 木村卓七五〇
- 8着 シンハヤサ 鬼頭 七六〇
- 9着 ダイニミハル 氏家 七六〇
- 10着 ナルセントップ 水上 七六〇

朝からの雨はやがて猛烈な襲雨となつて競馬の始まる頃は三十米先も見えないほど、しかしこのレースの始まるころまでには雨も上

つて青空も雲間に見えた。
全馬綺麗なスタート、第一障害でナルゼン登坂にてまどり、他の全馬一気こえて第二障害にか、る。

第二障害はオー、コマを先頭に、タロー、ジョウ、シャリ、キンがほぼ並んでつゞき、ハヤサとリツケはや、離れ、更に十五米おくられてミハル、二十米おくられてナルゼンとなつた。
第三障害はジョウ、キン、コマ、が先着、つづいてオー、タロー、シャリ、リツケハヤサが催差で到着。

- 2着 キンタロー 早七 七三〇
 - 3着 ダイニミハル 氏家 七五〇
 - 4着 タカラコマ 尾ヶ瀬 七六〇
 - 5着 キンシヨ 光富 七五〇
 - 6着 シャリイチ 平田(正) 七七〇
 - 7着 パンツバメ 広富 七三〇
 - 8着 ナルセントップ 水上 七五〇
- 全馬一斉綺麗なスタート後ナルゼン脚速冴えず、他は一団となつて第一障害に驚進、そのま、ミハルを先頭に両タローとつづいたが、バン、コマ、キン、ナルゼンはストップ寸時の息入れをしてからこえた。

第三障害にはカツタロー、キンタロー、ミハル、コマ、キン、シャリの順で到達、息入れ充分、頃合いよしと各馬仕かけ、先づカツタローこえ、二〇米でキンタロー、つづいてミハル、シャリ、コマとこえ、

一〇米おいてキンがこえる、ナルゼン、バンはそのあと五〇米もはなれる、最後の追い込みはカツタロー先頭で逃げ、そのあと二番手にはキンタロー、ミハル、シャリ、コマ四頭が並び接戦となる、各馬交互にストップ、ゴーを繰り返して熱戦を演ずる、場内喚声にどよめく中をカツタロー逃げ切り、キンタローは二位を維持し、シャリは六位に後退した、一着タイム四分三

☆ 帯広全公賞

(一着賞四〇万円)

第三回第六日目第九レース

- 1着 ダイニミハル 氏家 六六〇
- 2着 シャリイチ 平田 七〇〇
- 3着 ナルセントップ 水上 六八〇
- 4着 キンタロー 尾ヶ瀬 六六〇
- 5着 キンシヨ 山本俊 六八〇
- 6着 パンツバメ 広富 六六〇
- 7着 リツケイ 上ラ山本 六八〇
- 8着 タカラオー 木村卓 六六〇
- 9着 カツタロー 山田 七〇〇

スタート!!一瞬カツタローよどみ、他馬は一斉に出る、そのあとシャリ脚速にぶり、第一障害でリツ右によじれこれも一寸遅れたが、第三障害にはシャリ先頭となり到達次いでミハル、バン、ナルゼン、リツ、カツタロー、キンの順でたどりつく、息入れ数秒各馬一斉に仕掛けたがカツタローでん倒し下そり起立、馬具を補正する。

この障害はシャリ先づこえミハル、ナルゼン、キン、キンタローとつづく、直線混戦となる、シャリはミハルにかわされ、キンもキンタローに抜かれて、ゴールは一着ミハル、二着シャリでタイムは四分二三秒一。

- 1着 カツタロー 山田 七六〇

第二回第六日目第九レース

(一着賞一〇〇万円)

☆ 岩見沢記念

(一着賞四〇万円)

第四回第四日第九レース

- 1着 シャリイチ 平田 七五〇
 - 2着 タカラコマ 尾ヶ瀬七四〇
 - 3着 ナルゼントツ水上 七四〇
 - 4着 リツケイ上フ山本 七二〇
 - 5着 シンハヤブサ鬼頭 七三〇
 - 6着 キンシヨ 林 七三〇
 - 7着 タカラオー 木村卓七三〇
 - 8着 カツタロー 金山 七七〇
 - 9着 ダイニミハル氏家 七四〇
- スタートはリツや、立ちおくれ、第一障害ナルゼン、リツの両馬ストップして息入れ、他はそのま、ほとんど一団でそえる。
- 第三障害にはオー、シャリ、コマ、ミハル、シン、キン、ナルゼン、リツの順で到達、シン膝ついたがすぐ立つ、カツタローでん倒下そりし、馬丁と共に起立させ馬具補正。
- 先頭シャリがこえ、あと四十米でコマ、十米おいてシン、キン、ナルゼン、リツケイと続々こえる、逃げるシャリと二位のコマを追って、後続の四頭べん打激しく追いなルゼン三位に進出、リツケイも敢闘よく四着に喰いこむ、一着シャリのタイム五分〇五秒八。

ばんえい競走馬

資源対策資料(1)

◎冬山造材に働らく産業用馬

(南坂俊雄氏提供録音テープ、写真は上フ山本幸一氏提供)

問 南坂氏

答 手塩営林署(遠別町)造材主任

馬を入れるのに、主任さん、大変なご苦労をなすつたと聞いておりますが。

「エ、やっぱり今現実に馬が足りないという状況ですからね。

これだけの数量を今、うちの方で全部畜力で行うことになれば、北海道のスマからスマまで、探す

ば車の免許がなければ山へ入れないでしょう。

「マア結局そういうことになるんです。馬集めるつたって簡単にいかんで、冬に馬のルートを使つて集めて貰うということになるんで、かなり経費もか、るワケですよ」

「ことはどの位の町村で集められましたか。

「そうですね、大体六ヶ町村です」

「何頭集めたんですか

「今二十四頭ですね」

「大体、石数はどの位

「一〇、四〇〇立方米」

「すると大体三六〇〇石ですか

「三七〇〇石です」

馬でやれば山を愛護するということを聞いています

が、だいがブルト

ザーとは違いますか。

「それは確かにね、ブルやなんかと違って自然保護のためには確かに馬でやるということはい

は。

「一応契約は三月二十六日になってます」

「夏はどうなるのですか。この丸太を集材したあとに残っている丸太を、馬で集材するということはありませんか。

「遠別の場合は夏山はやっていません。この仕事は営林署の直営生産ですから、馬で集材することも夏はやっていません」

「この山の造材計画は

「一応遠別の営林署としてあと五年計画となっています」

「一頭の稼ぎ高は平均一日どの位になりますか。

「今の場合大体八〇〇円ということになってます」

「どうも有難うございました。

(南坂氏—馬主会副会長)

(山本氏—騎手会副会長)

◎ 帯広市林務係々長長川岸氏同係員阿部氏談

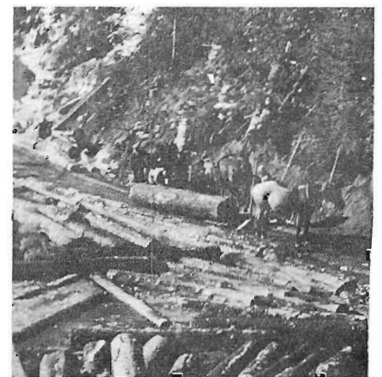
伐採には皆伐、択伐、除伐の四種類がある。

◎ 米国からクライズデル、ベルジンの輸入

過般三月二十一日春分の日の休みを利用して、本会の小路口業務課長、岩崎技師がアメリカから

林道造成や全伐の場合に行うもので、ブルト—ザーでやる。五、

皆伐



まりこ造林山

六米の作業道路が必要である。

択伐

樹令二十年、直径三十厘米位の樹木を間引的に伐採するもの、馬でやる。

間伐

樹木を平均に育てるための間引、樹令十五年位、主に抗木として売却する馬でやる。馬の作業道路は幅一米位でよく、起状の多い不齋地、急斜面など馬でなければ出来ない。費用も安上りだ。

除伐

育たぬ弱い木、雑木、つた等を除くもの。人力でやる。

◎ 米国からクライズデル、ベルジンの輸入

過般三月二十一日春分の日の休みを利用して、本会の小路口業務課長、岩崎技師がアメリカから

林道造成や全伐の場合に行うもので、ブルト—ザーでやる。五、

皆伐



層雲峡西の目造林山駈者は西本騎手

ようなことになるんですよ」。

「そんなことになる、車がい

良いですね。山にはいいと思いま

す。いつまでやりますか、終る時



金山町造林運搬

道畜産課の資料によれば昭和四十六年度の輸入馬肉は四六、五四八トンとある。

◎ 輸入馬肉の量

重量がある上歩様軽快ならば、今後のばんえい競走馬として、作業用肉用として申し分がない。今後が楽しみである。

輸入した重挽馬クライズテール、ベルジン種を見に行った。所は有珠郡壮瞥町森牧場（森英夫氏）、輸入馬はクライズテール五頭ベルジン一頭の六頭。クライズテールは種おす用一頭、めす四頭（三頭は受胎中一頭は三才で生産用）馬体は頭頸胸にかけて重厚で、後軀は一寸軽い感じ、現在は小々やせているが、充実すればゆうに一、五〇〇キロ以上になるという雄大な重挽体型、歩様は軽快である。

ベルジン種は種おす用で体高約一米七五、いかにも挽馬らしい体型だが少々短胴の感じ、頗る温順という。六千ドル（一八三万円）森さんの話によれば、世界で一番大きな馬が欲しいと思ひ、こんど欧米を旅した際に探してみたがもうこんなに大きな馬はみかけないので、これを求めてきた。米国では重挽馬六頭曳の繋駕競走が行われ、その中心となる強い馬を選んで、二頭曳に三屯半の車輛をつけて、ばん馬競走をやっている。

昭和 47 年度 名儀貸し 防止 業務 成績

調査時場所	名儀馬件数	契約変更数	名議貸解消数	騎手同家族名儀
帯1 5.26	7			24
北1 6.9	1	16		25
岩1 6.22	12	25	5	25
旭1 7.5	3	29	7	24
旭2 7.20	4	22	6	22
帯2 8.5	5	32	5	22
帯3 8.18	4	21	6	19
岩2 9.1	2	18	2	17
北3 9.14	1	27	2	15
北4 10.5	1	6	1	14
旭3 10.12	2	20	2	15
岩4 10.26	2	15	2	15
計	44		38	

競馬終了時11月14日現在

名儀馬未解消数 6件

その後用途変更1と殺1 名儀変更4

預託契約状況調査成績

(1) 昭和47年度に徴した預託契約について調査するに契約方法は25種461件あり、その内訳を大別すれば次のとおりである。

- (2) 特に預託料進上金をきめていないもの
 - (イ) 同一戸籍者（家族～自馬）のもの 161件
 - (ロ) 収支一切を調教師に委任するもの 146
 - (ハ) 収入は馬主に、支出も馬主が負担するもの 164
 - 計 411
- (3) 預託料、進上金をきめているもの
 - 預託料月50,000円進上金賞金20% 1
 - 計 1
- (4) 預託料のみ又は預託料に進上金を含めているもの
 - (イ) 預託料 月50,000円 6
 - (ロ) 預託料 月50,000円 赤字分は馬主負担 3
 - (ハ) 賞金の10% 2
 - (ニ) 賞金の20% 4
 - (ホ) 賞金の30% 2
 - (ヘ) 競馬終了後決済し残額ある場合その70% 2
 - (ト) 賞金の70% 諸手当の全額 1
 - (チ) 賞金40万円以下全額、40万円以上その70%と諸手当全額 1
 - 計 21
- (5) その他
 - 賞金諸手当受領額により競馬終了後精算するもの 28
 - 計 28

北海道市営競馬関係者名簿

旭川市 市長

審議員
畜産課長
畜政係長
主査

係員

五十嵐広三
大久保吉蔵
浅川 英夫
金子 民男
松森 宏次
佐藤 正春
鷺見 隆
鶴巻 伸夫
藤田 東洋
酒井 進
宮本 昭男
高田 政昭
林 幸吉
沢沼 勝

岩見沢市 市長

農務部長
畜産課長
畜産係長
技師
主事
事業係長

主事
主事補
技師
業務技師補

国兼 孝治
戸沢 寛治
小倉 輝行
秋山 厚三
川尻 一義
成田 脩
中川 達雄
沢田 勇作
前田 憲孝
波田野耕一
権名 宏
吉田 信義
出藤 賢一

帯広市 市長

競馬主幹
主査
主幹付

吉村 博
小田原俊幸
吉田 正
川岸 政夫
梅本 俊夫
藤嶋 寿男

北海道市営競馬協議会
札幌市中央区北四条西四丁目

会長
副会長
副会長
監事
監事

(旭川市長)
(北見市長)
(岩見沢市長)

監事
庶務課長
事務局長
主事
主事

宇佐見福生
久田 正治
桜田 正明
坂井 清治
平元 清勝
小野 盛男
前川 幸男
中川 護

業務課長
技師

小路口 司
大原 尚
串岡 博
穴吹 孝
岩崎 善雄
横井 規雄
工藤 洋樹
広川 健治
佐川 良太
光石 基

主事補
嘱託

北海道

ばんえい競馬馬主会・騎手会
馬主会
会長
副会長
騎手会
会長
副会長

宮越 正雄
南坂 俊雄
宇高 輝次
中西 関松
松原仁三郎
上フ 山本 幸一

人事異動

市営競馬関係者中、昭和四十七年度に次のとおり、人事異動があった。

▽転出

岩見沢市 商工部長に
星野安彦 (産業経済部長)

図書館長へ
市村典男 (畜産係長)

帯広市

選管委員会事務局長

水野正光 (経済部長)

都市開発部次長に

花房政男 (農政課長)
山本 英宣 (畜産振興係)

▼退職

秋山光雄 (主事補)

北海道競馬事務所

所長 志摩 忠男
次長 神田 鷹雄
総務課長 工藤 順一
投票会計課長 土門 正美
競技課長 鈴木 康雄
施設課長 角田 正久

・編集後記

早いものである。市営競馬協議会も発足以来五年たった。昭和四十三年二月一日創立総会があつて、四月一日から事務所を開設した。そのとき辞令を交付した旭川市の森岡助役さんは既に物故されている。
本号は本会創立五周年を記念して開いた「ばんえいを語る」座談会を中心記事として編集した。

この座談会には当初の公営ばんえい競馬主催者である道の執行部と、各地協力会各市の古強者が一堂に会した。

いわば初代競馬課長の佐伯体制が再現したわけである。

今のばんえいと昔のそれと比較すると誠に今昔の観があるが現在の大きな発展もすべて一年

一年の体験と苦勞の積み重ねであつて、いづれ将来、過去を振り返つてみれば現在も又昔語りとなるのであろう。

当日は先輩からほめられたり驚かれたりしたが、今もこの先輩達が仕事をしていたら、我々よりもっと素晴らしいことを

されたに違いない。

佐伯さんの言葉の中に「ばんえい競走を中心にして馬を考へて欲しい」というのがチヨイチヨイ出てくる。

昨年から動き出した馬資源対策は、本年二年目に入る。この対策の核心である馬産奨励事業はことし具体案ができ、一般に公表されるはこびとさうろう。

「馬は必要なのか」とことは馬主調教師騎手で調査網を組織する。既に続々報告がきている馬の写真、レポート、録音テープ、ハミファイルム、明年の本会報はこれらのレポートで埋まるだう(ウ)

昭和48年度 市営競馬開催日程

○は日曜・祭日

5	1	2	③	4	⑤	⑥	7	8	9	10	11	12	⑬	14	15	16	17	18	19	⑳	21	22	23	24	25	26	㉑	28	29	30	31	
				旭川				旭川																								
6	1	2	③	4	5	6	7	8	9	⑩	11	12	13	14	15	16	⑰	18	19	20	21	22	23	⑳	25	26	27	28	29	30		
				旭川																												
7	①	2	3	4	5	6	7	⑧	9	10	11	12	13	14	⑮	16	17	18	19	20	21	⑳	23	24	25	26	27	28	㉑	30	31	
				北見																												
8	1	2	3	4	⑤	6	7	8	9	10	11	⑫	13	14	15	16	17	18	⑰	20	21	22	23	24	25	⑳	27	28	29	30	31	
				岩見沢																												
9	1	②	3	4	5	6	7	8	⑨	10	11	12	13	14	15	⑯	17	18	19	20	21	22	⑳	24	25	26	27	28	29	⑳		
10	1	2	3	4	5	6	⑦	8	9	⑩	11	12	13	⑭	15	16	17	18	19	20	⑳	22	23	24	25	26	27	⑳	29	30	31	
				北見																												
11	1	2	3	④	5	6	7	8	9	10	⑪	12	13	14	15	16	⑰	18	19	20	21	22	⑳	24	⑳	26	27	28	29	30		
				帯広																												

昭和48年度道営競馬開催日程

○は日曜・祭日

5	1	2	③	4	⑤	⑥	7	8	9	10	11	12	⑬	14	15	16	17	18	19	⑳	21	22	23	24	25	26	㉑	28	29	30	31	
6	1	2	③	4	5	6	7	8	9	⑩	11	12	13	14	15	16	⑰	18	19	20	21	22	23	⑳	25	26	27	28	29	30		
7	①	2	3	4	5	6	7	⑧	9	10	11	12	13	14	⑮	16	17	18	19	20	21	⑳	23	24	25	26	27	28	㉑	30	31	
8	1	2	3	4	⑤	6	7	8	9	10	11	⑫	13	14	15	16	17	18	⑰	20	21	22	23	24	25	⑳	27	28	29	30	31	
9	1	②	3	4	5	6	7	8	⑨	10	11	12	13	14	⑮	⑯	17	18	19	20	21	22	⑳	24	25	26	27	28	29	⑳		
10	1	2	3	4	5	6	⑦	8	9	⑩	11	12	13	⑭	15	16	17	18	19	20	⑳	22	23	24	25	26	27	⑳	29	30	31	
11	1	2	③	④	5	6	7	8	9	10	⑪	12	13	14	15	16	⑰	18	19	20	21	22	⑳	24	⑳	26	27	28	29	30		

和48年5月

幌市中央区北4条西4丁目労金ビル5階（TEL）代表221-9171